Vol.32

令和７年５月３１日
防大同窓会機関紙

小原台だより

電子版第１０号

◆防衛大学校同窓会長からのご挨拶
◆学校長に聞く
◆防衛大学校関連
◇令和６年度カッター競技会について
◇令和６年度水泳競技会の観戦及び激励
◇令和６年度防衛学特論研究レポート発表会
◇卒業留学生記念祝賀会　９カ国２３名の卒業を祝う
◇令和６年度断郊・持続走競技会の激励
◆同窓生は今
◇第６８期生に聞く
◇今人生、真っ盛り（３０期生）
◆活動報告
◇令和６年度防衛大学校同窓会代議員会（実施報告）
◇第４７期生ホーム・ビジット・デー（ＨＶＤ）
◇第２４期生ホーム・カミング・デー（HCD）
◇第２７回防衛大学校同窓会テニス大会
◇第２６回防衛大学校同窓会ゴルフ大会
◇第２４回防衛大学校同窓会囲碁大会
◆会長ルーム・活動記録
◇令和６年度防衛大学校入校式典
◇令和６年度開校記念祭への参加
◇令和６年度防衛大学校卒業式典
◆連絡事項

◆防衛大学校同窓会長からのご挨拶

防大同窓会長　丸茂　吉成

この度、村川前会長の後を受け、防衛大学校同窓会長を拝命しました丸茂です。会員の皆様方には、平素から同窓会活動に対し、ご理解とご支援をいただき、心からお礼申し上げます。

さて、防衛大学校では、本年３月第６９期生が石破内閣総理大臣をはじめとする多くの御来賓とご父兄を含む参列者の皆様、そして在校生からの祝福を受けて卒業し、４月５日、新たに第７３期生が入校いたしました。また、女子比率 16%・留学生比率 6%（昨年度）の現状に鑑み、学生の住環境向上のため、昭和５４年に廃止された第５大隊の復活に向けた新学生舎建築工事や、開校祭記念祭の女子「棒引き競技会」等、新たな取り組みもおこなわれております。

防衛大学校同窓会は、皆様ご存じの通り、第１期生を中心に昭和３６年に設立され、各期生会を基盤として組織されています。主に本科卒業生を会員とし、その数は、２万６千名に上ります。現在、退職会員が約１万４千名となり、現役会員を上回り、すでに、第１期生会、第２期生会、第４期生会、第６期生会、航空第３期生会の方々が組織的活動に終止符を打たれています。

今年から来年にかけては、開校祭記念式典（１１月）時、ホーム・ビジット・デー行事として第４８期生が、卒業式（８年３月）時のホーム・カミング・デー行事及び入校式（８年４月）時のホーム・カミング・デー２行事には、それぞれ第２５期生、第１４期生が、学校長のお招きにより、懐かしい小原台で旧交を温められる予定です。

今後の同窓会の業務運営に当たっては、歴代会長の思いを引き継ぎ、学校側と意思疎通を図りつつ学生の意見を反映するとともに、期生会・地域支部（海外支部含む）等と連携した会務運営基盤の充実と業務の一層の効率化に留意して、母校の充実・発展への寄与を重視し、あわせて会員相互の親睦交流、社会活動への寄与等の事業を推進して参る所存です。

近年大きな課題となっている会員の会費納入率の極端な低下については、卒業生及び本科学生に対し同窓会活動の意義について理解を得る努力を重ねて参りましたが、目に見える成果は得られておりません。従って、事務局の業務実施要領の見直し、Web 会議システムの活用等による事業・業務の効率化・経費節減を図るものの、会務の運営には、同窓会資産の一部を取り崩して充当せざるを得ず、財務状況の厳しさは継続すると見積っています。

本年度以降、同窓会本部事務所の保持要領を含めた経費執行の大幅な見直しも視野に入れた中期的な検討を行う予定としており、このような状況にあって、「同窓会とは何なのか？」「なぜ必要なのか？」を今の時代に照らして、あらためて考える良い機会ととらえ、設立目的に沿った活動を行うことが、若い在校生諸君等の理解を得る唯一の方法だと信じ、自ら先頭にたって行動していきたいと考えています。

戦後最も厳しく複雑な安全保障環境に直面する我が国おいて、将来の国防を担うリーダーを育成する防衛大学校の使命はますます大きなものとなっております。我々同窓会役員一同は、久保学校長はじめ学校関係者、そして会員皆様方のご意見を賜りながら連携を深め、母校の充実と発展のために尽力する所存です。どうか会員の皆様方におかれましては、より一層の同窓会へのご支援ご協力を賜りますようお願い申し上げ、甚だ簡単ではありますが、会長就任にあたってのご挨拶とさせて頂きます。

令和７年４月７日
防衛大学校同窓会長　丸茂吉成

【　丸茂吉成（まるもよしなり）略歴　】

２７期、航空要員、国際関係論専攻、ワンダーフォーゲル部

昭和３４年　群馬県出身
平成２６年　西部航空方面隊司令官
平成２７年　航空幕僚副長
平成２９年　航空幕僚長
令和　２年　退官
現在、三菱電機株式会社　顧問

◆学校長に聞く

2025.04.19

防衛大学校
学校長　久保文明

本年度も貴重な投稿の機会をいただき、心より御礼申し上げます。せっかくのお誘いですので、最近の防衛大学校の状況について簡単にご報告させていただきます。

米士官学校への 4 年間留学

苦心しているのは、日本国内の多くの大学や企業同様、少子化の中でいかに人を確保するかです。昨年秋実施の令和 7 年度入試(正式には採用試験、73 期生となります)において、高校長推薦および総合選抜では幸いにも志願者増となりましたが、一般入試では減少しています。ただし、減り方は日本人の 18 歳人口の減少ペースとほぼ同じなので、やむを得ない面があるかもしれません。むしろ前二者において志願者が増えたことに注目していただければ幸いです。とくに推薦入試では面接会場に関して、以前のように全志願者に防大に来てもらうのでなく、札幌、仙台など主要都市に来てもらうようにして、志願者の負担を減らしました。また、近年は自衛隊地方協力本部からの御招待に加えて、防大の方でもイニシアティブをとり、年間を通じて積極的に講師・職員を全国各地に派遣して宣伝に努めていますし、開校記念祭やオープンキャンパスにおける入試説明会も充実強化しています。

ただし、防大は志願者増を、単に入試の工夫や改革のみで達成しようとしているわけではなく、基本的には防大自身の魅力化を通じて実現しようとしています。あるいは、単に数だけでなく、可能であれば志願者の質も向上させたいと考えています。より根本的には、自衛隊や公務員そのものの魅力化も必要となりますが、これは私どもの守備範囲を超えた領域です。ただし、現在石破内閣のもとで総理自らが議長となって実施されている「自衛官の処遇・勤務環境の改善及び新たな生涯設計の確立に関する関係閣僚会議」で示された基本方針が、防大志願者増にも追い風になっていることは確実であると感じています。

防大の魅力といいましても、そう簡単なことではありません。魅力化とは何かなどという定義から入ると、それだけで何か月も費やしてしまうかもしれません。ここでは、具体的な取り組みを紹介することで、目指すところをお伝えしたいと思います。

もっとも重要な試みは、米国の陸軍士官学校、海軍兵学校、空軍士官学校へ防大生を四年間留学に送り出すことです。防大新入生から希望者を募り、夏の終わり頃までに一校につきおおよそ一人の候補者を決め、年末から年明けにかけて受験手続を行う。合格すれば二年生の六月に渡米、四年後の五月末に卒業となります。

米士官学校卒業と同時に防大の卒業証書を授与し、陸海空それぞれの幹部候補生学校に、防大同期と比べると約一年二か月遅れで着入校するという仕組みです。約一年二カ月の遅れにつきましても、同期と同じ扱いになる人事管理を陸海空各自衛隊にご検討いただいております。なお、渡米後も防大から学生手当を支給し様々な支援を提供しますが、万が一幹部候補生学校に入校しない場合には償還金が適用される予定です（本年通常国会に法案提出）。

防大から米国士官学校への留学制度としては、これまで一学期間の交換留学があるのみでしたが、これからは四年留学が加わることになります(その他、一週間前後の短期留学の機会が少なからず存在します)。米士官学校に日本から留学する道は、防大に入学することが前提になります。ぜひとも優秀で志の高い高校生に防大を志願して欲しいと願っています。本留学制度の実施を実質的に決定したのは昨年の 2 月頃でした。すでに合格者の中には防大に入校しない旨意思表示をされた方もいました。私どもはすべての合格者にお手紙を送り、本留学制度の開始を周知したところ、数名が翻意し入校してくれました。まだ入校を決めていなかった方にもその決定に影響を与えた可能性はあったのではないかと想像しています。

いうまでもなく、このような制度を開始したのは、単に防大の強化だけが目的ではなく、自衛隊全体の強化であります。米士官学校において英語力を磨いただけでなく、防大とは異なるカリキュラムで学習し、異なる訓練を受け、幅広い人間関係を築いた幹部自衛官候補の存在は、必ずや幹部自衛官集団の中に多様性と強靭性をもたらすはずだと考えています。

現在防大の留学制度には、短期も含めればかなり多種多様なものが存在しています。米陸軍士官学校で開催されるサンドハースト競技会やインド海軍士官学校でのヨット競技(アドミラルズ・カップ)への参加など訓練・競技系派遣も含めるとさらに多様になります。今年度も合計で 70-80 名程度を派遣できそうです。このような国際性豊かな防大の姿を、今後ともぜひ高校生に積極的にアピールしていきたいと考えています。

学生舎生活の変化

学生舎の雰囲気あるいは学生間指導のあり方もかなり変わったように感じています。数年前、当時の訓練部長の判断で乾布摩擦が廃止されました。これには異論もあるかと思います。ただし、学生は圧倒的に喜んでいるようで、「復活させようか?」と尋ねても「ぜひ」という答えはまったく返ってきません。

第二学年進級時に大きな関門となっていたカッター競技の準備段階において、かつてはカッターの操作技術と無関係の上級生による体力強化指導が存在し、それが相当厳しかったようですが、最近それを圧迫型から励まし型に変更しました。ちょうど四月一日に着校し五日までに入校を決める新入生の一部はその厳しい「指導」を学生舎内で目撃して恐れをなしていた面もあったようです。どの程度因果関係があるか不確かな部分もありますが、二年前から着校後入校前に辞める新入生の数が激減しました。

いわゆる容儀点検もかつては理不尽に厳しかったようですが、現在は問題があれば注意するものの、外出不可とはしていないようです。一斉喫食は頻度がコロナ後顕著に少なくなっていますが、実施される際には、下級生が話題を提供しなければならないといったかつての「慣わし」は無くなり、現在はむしろ上級生が話題を提供しているようで、

こちらも相当変わりました。

とくに大きく変わったのが朝の清掃で、現在は四年生を含めて上級生も一緒に行っています。学校からの指令というより、むしろ学生の、とりわけ学生隊長ら指導部の主体的な選択でした。永らく不変・不易と思われていたことが変わるのを目撃するのは驚きでもあり、まことに嬉しいことでもあります。むろん、学生間指導のあり方が変わったからと言って、規律が緩んでよいと考えているわけではありません。現在でも、防大での生活は十分厳しいのではないかと愚考します。また、人不足の中、将来性が見込まれながら些細なことで辞めてしまう学生を目撃するのは悲しいことです。

学生の代表は教職員を交えた学校の正式な会議において、もっと勉強する時間をくださいと正面からアピールしてきました。学生からもっと勉強したいと言われて、ダメだという教育組織は存在しないと思います。具体的には運動系の校友会活動が月曜から金曜まで義務になっていますが、一日ないし二日勉学・読書・文化系校友会など、他の活動に従事できるようにして欲しいという要望でした。

「時間は自分で作るものだ」という反論もありえます。ただ、これは大人の正論でありつつ、肝心なところで学生の真摯な問いかけから逃げているような気がします。個人の努力では克服し難い制度や規則の壁はやはり厳然として存在しているからです。可能な限り、こうした声は本質的な形で受け止めてあげることが必要でしょう。現在、これについては校友会において前向きの方向で検討中です。

むろん、週末に全国大会に出場予定の選手であって、成績も優秀な学生に練習を禁ずる必要はないでしょう。ただ、落第すれすれの学生が現実逃避で毎日運動系校友会活動に没頭しているとすれば、それは健全な姿ではありません。

自由な時間をあげても大半の学生はスマホでゲームをするだけなので意味がない、といった反論が予想されるところであります。そうかもしれません。しかし、少数かも知れませんが、勉強のためにより多くの時間を欲しがっている学生がいることも事実です。ゲーム派への対応を優先させることによって、すなわち運動や行事で学生をがんじがらめにし、自由な時間を剥奪することで、かりに勉強派が落胆・失望してしまったら、さらには防大・自衛隊を辞めてしまったら、それこそ防大・自衛隊にとって大きな損失であり悲劇であります。

たしかに、古来「小人閑居して不善を為す」といった諺があります。しかし、教育機関たるもの、多様な学生に対応するのが本旨であると考えるべきでしょう。意欲のある学生はさらに伸びるように、同時に必ずしもそうでない学生に対しては少しでも前向きになるように促していくことが、プロの教育者・教育機関の取るべき道であると思います。

若干の小さな試み

毎年 7 月は防大の訓練期間でして、学生は各地の自衛隊基地・駐屯地等で集中的に訓練を受けます。昨年から訓練部のアイディアに基づき、この夏季訓練中に、地方に散った学生を近隣の地方協力本部に連れていき、そこで地本の業務について研修し、場合によっては一部の業務のお手伝いをさせてもらっています。このメリットは、学生に地方協力本部の業務を理解させ、とりわけ地方協力本部がいかに苦労して自衛官をリクルートしているかを知ってもらうことにあります。学生の一部は将来、本部長などの形で実際にこの業務に従事することになるでしょう。防大新入生を含め、地方協力本部職員が現場で苦労していることを肌感覚で理解すれば、下級生に対する態度も自ずと変わって来るのではないかと期待しています。

ある時、韓国の士官学校に長期留学していた学生による留学報告会において、教室の後ろに居眠り防止用の立ち席が用意されていることを紹介してくれました。これは、睡魔に襲われた学生が、立ちながら講義を聴講し、ノートもとりやすく設計された特殊な「椅子」です。すぐにこれはいいアイディアであると判断し防大でも取り入れたいと考えましたが、正面から財務省に予算要求して認めてもらえるものかわかりませんでした。総務部長らに相談したところ、防大の判断で充分購入可能であるとのことで、早速防衛学教育学群において試験的に導入してみました。仄聞するところでは、睡魔に襲われた学生が積極的に立ち席に移動しており、人気は上々であるとのことです。学生にも直接聞いてみたことがありますが、愛用しているとの返事もありました。ちなみに、すでに 10 年くらい前にワシントン・ポストの記者であった故フレッド・ハイアット氏の職場を訪ねた時、彼は、否その部屋の多くの記者が、立ち席にて仕事をしていました。ところ変われば「最先端」でファッショナブルな仕事ぶりでもあるようです。立ち席については今後さらに増やしてもよさそうです(決して立ち席を強要する趣旨ではありません)。

防大は昭和 33 年から、すなわち学校創設 6 年目から早々とタイからの留学生を受け入れており、その意味での国際化には当初から熱心でした。現在の留学生受け入れ制度(教育受託制度)の基本形は、最初の 1 年間は主として日本語を学習し、2 年目から 4 年間日本人学生と同じ生活をするというものです。現在アセアン諸国(ただしブルネイを除く。ミャンマーは新規受け入れ停止中)、モンゴル、東ティモールから留学生を受け入れています。これに令和 7 年 4 月からは、トンガとフィジーが加わります。その他、韓国からは 1 年間ないし 2 年間で常時留学生が来訪しており、それにアメリカ・フランスの士官学校からの一学期間交換留学生(主として 8 月末から 12 月後半まで)が存在します。2 千人弱の本科生総数のうち 110-120 名程度は留学生であり、防大は非常に国際的な士官学校となっています。これは日本人学生にもきわめてよい影響を与えているはずです。

送り出す国も、自国の将来を託す有望な若者を日本という国を、そして防衛大学校を信頼して 5 年の長きに渡って私どもに預けてくれています。この意味は大変重いと確信しています。ともすると、防大教官・指導官らの関心は日本人学生の方に集中しがちとなりますが、「われわれは送り出し国の期待に十分応えているか」をつねに自問自答していく必要があります。

その点で、防大と留学生を大いに助けてくれているのが、留学生協力家庭(ホスト・ファミリー)の皆様方です。週末、夏季休暇、年末年始、そして春季休暇の折など、どうしても教職員だけでは手が届かないところが生じてしまいます。また、本校教職員がどれほど業務として頑張っても、日本の家庭の温もりや暖かさまで留学生に伝えたり提供したりするのは難しいと思われます。留学生協力家庭の皆様方は、可能な範囲でご家庭に招いてくれ、あるいは食事や観光などに誘いだしてくれています。留学生卒業行事においては、留学生が協力家庭の皆様を「お父さん」「お母さん」と呼んで心から慕っている様子を見せてくれますが、これは実に心温まる光景で、とても感動的です(「実の子でもなかなか「お父さん」「お母さん」とは言ってくれない」との呟きも聞かれました)。留学生にとって、ホームシックになったときなど、協力家庭からの支えが何よりであったのではないかと想像する次第であります。

ちなみに、上述いたしましたように、現在防大で受け入れる留学生数は増加基調にありますが、それに比して留学生協力家庭はやや不足気味です。もしご興味をもっていただけるのであれば、防大までご一報いたければまことに幸甚です。私の着任以来、協力家庭の皆様には、カッター競技、遠泳大会、隊歌競技会、水泳大会、演劇祭、様々の講演会、開校記念祭など、留学生自身が参加する行事を中心に、可能な限り防大にご招待しています。防大に来る機会が増えて防大に少しでも馴染んでいただき、同時に面倒をみていただいている留学生との話題が少しでも増えればと願っている次第です。

数年前から、夜間(といっても夕暮れ時から 22 時までですが)防大の時計台を照明でライトアップしています。下か

ら照らし上げる設備がありながら(電気代や近所に対する配慮からか)使用していなかったようで、もったいないことだと感じ、点灯するようにしました。私が昭和 59 年から 61 年にかけてニューヨーク州北部によるコーネル大学で学んだ際、カユガ湖の対岸からライトアップされた高台にある同大学の美しい建物を見て感動しました。その記憶は 40 年近く経っても鮮明です。また、平成 11 年から 1 年間研究生活をしたワシントンのジョージタウン大学のポトマック川対岸からの夜景も見事でした。学生からは横須賀の街中から時計の灯が見えると聞きました(まだ門限に間に合うことを意味するようです)。東京湾からも、浮かび上がっている姿が見えるかもしれません。護衛艦などから卒業生にも見て貰えると嬉しい限りです。

やや大袈裟な例えで恐縮ですが、1630 年、マサチューセッツへの初期の入植者の一人であったジョン・ウィンスロップは、ピューリタンが建設するコミュニティを「丘の上の町」(a city upon a hill)と譬えました。世界の範となるべきピューリタンの試みが成功するか失敗するか、世界中の眼が注がれているという意気込みと警告が込められています。防大にも、少なくとも一部は、このような側面は存在するのではないかと感じています。規律ある厳しい生活を自ら求め、危険を顧みず職務を遂行するために、まさに範を示そうとしている若者たちがここに集っています。海外から見ている人もいるかもしれません。時計台のライトアップから話がやや飛躍してしまいましたが、防大生はこれくらいの気概と誇りをもってもおかしくないと思う次第です。

最後になりましたが、本年 4 月 26 日から 30 日にかけて防大としては画期的なラグビーの国際士官学校対抗戦を小原台で開催する予定です。イギリス海軍兵学校、オーストラリア国防大学、フランス海軍兵学校を招待して実施します。数年前に防大チームがフランスで実施された英仏対抗戦に招待されたことがきっかけです。ぜひ防大チームを応援していただければ幸いですが、この機会に見学を兼ねてキャンパスにお立ち寄りいただくのもいかがでしょうか(ただし事前手続きが必要です。お問い合わせ先は末尾の注を参照してください)。

さまざまな話題に触れたためまとまりの無い文章になってしまいました。最近の防大の雰囲気の一端でも感じていただければ望外の幸せです。引き続き防大へのご支援と後輩諸君の応援をどうぞよろしくお願い申し上げます。

◆防衛大学校関連

◇令和６年度カッター競技会について

2024.06.11

令和６年４月２４日（水）、第７１期生による令和６年度カッター競技会が走水海上訓練場沖で実施されました。今年度も予定どおりに開催することができ、同窓会からは丸茂副会長が参加いたしました。

競技は各大隊４個クルー、合計１６個クルーが参加し、各大隊のクルーが獲得した点数の合計で競う「大隊対抗の部」と、クルーごとのタイムで競う「クルー対抗の部」の２つがあります。防大の走水海上訓練場沖に設定されたコースは、回頭ブイを折り返す距離 2,000mのコースで、１回のレースは４艇で実施されます。

午前中の予選に引き続き午後から行われた決勝では、各大隊から１個クルーずつ出場というさながら大隊対抗のような形になりました。なお、決勝レースに参加するクルーは、予選レースと同じクルー構成で参加することはできません。競技への全員参加を目指すため、クルーを構成する１６名（艇指揮１名、艇長１名、漕手１２名、予備員２名）の内、最低でも７名を交代させなければならないのです。予選と決勝のクルー構成をどのようにするかは、各大隊の思案のしどころです。

決勝レースは、雨交じりのやや悪天の中での競技となりましたが、海面は穏やかで競技にはまずまずのコンディションとなりました。昨年から大活躍している空撮用のドローンが飛び回る中、決勝レースが開始され、走水観音崎ボードウォークに集まったご家族からの熱い声援を受けながら各クルーは必死に漕ぎましたが、最後に決勝レースを制したのは、第３大隊のクルーでした。

競技会の結果は次のとおりです。

	大隊対抗の部	クルー対抗の部
順　位		
優　勝	第１大隊	第３２クルー（１２分４２秒）
第２位	第４大隊	第１２クルー（１３分０８秒）
第３位	第２大隊	第４２クルー（１３分３１秒）
第４位	第３大隊	

表彰式は記念講堂で行われました。

大隊対抗の部では、久保学校長から優勝大隊である第１大隊に対して、表彰状、優勝旗、そして学生舎玄関に掲げられる「カッター競技会優勝大隊」の看板が授与されました。クルー対抗の部では、優勝から第３位のクルーに対して、久保学校長から表彰状が授与され、丸茂副会長からはメダルが授与されました。なお、表彰式の中で、授与されたメダルは防衛大学校同窓会から寄贈された旨のアナウンスがありました。

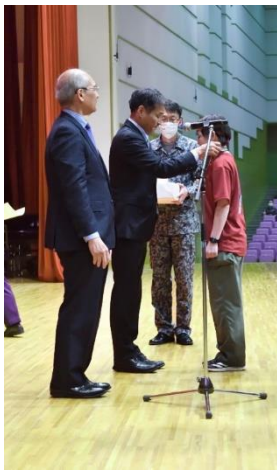
最後に久保学校長が訓示され、令和６年度のカッター競技会は無事に終了しました。

ご家族の声援を受けての必死のとう漕

ボードウォークからの大声援（もはや風物詩？）

歓喜する優勝クルー

賞状を授与する久保学校長



クルーの代表にメダルを授与する丸茂副会長

久保学校長及び丸茂副会長から表彰を受けた学生代表

（総務部　３２期空　川波清明　記）

◇令和６年度水泳競技会の観戦及び激励

2024.09.17

令和６年９月３日（火）、令和６年度防大水泳競技会が開催され、同窓会を代表して佐藤副会長が観戦及び激励をしました。当日は長く日本列島に停滞した台風１０号の余波を受け実施が危ぶまれましたが、時折降る強い雨にも負けない選手一人一人の力強い泳ぎと各大隊の活気あふれる応援で競技会は大いに盛り上がりました。

観戦に先立っての久保学校長との懇談

コロナによる制限が全面解除された昨年度大会では、リレー競技の充実により大隊対抗をより盛り上げる工夫がなされましたが、今年度大会では「５０ｍ期別レース」が新種目として設けられました。これは５０ｍ泳いだ結果が、期別と同秒の「設定タイム（７２期なら７２秒）」に近い者から高成績になるというもので、泳力が決して優れない者でも競技会に参加できるよう企画され、事実、参加者の多くは１学年時の遠泳訓練を赤帽で始めた学生だったようです。

新種目「５０m期別レース」と熱気溢れる応援

観戦中の佐藤副会長

競技結果は、午前中を首位で折り返し、また水球競技でも優勝した第３大隊が、３連覇を目指す第２大隊の猛追を振り切り見事優勝、以下第２大隊、第４大隊、第１大隊の順となりました。

表彰式は、記念講堂において全学生・職員が参加して行われ、競技会会長である久保学校長から「大隊対抗の部」で優勝した第３大隊に対して賞状と優勝旗が授与されました。また、「中隊対抗の部」の優勝チーム及び「個人の部」の優勝者に対しては、佐藤副会長から同窓会寄贈のメダルが贈呈されました。続いて、佐藤副会長が講評を行い、自身の出身大隊である第３大隊の優勝を喜びをもって称賛するとともに、同窓会が母校の向上発展に寄与していること、卒業後は一人一人がこれに関与してほしいとの期待を述べ学生を激励しました。そして最後の久保学校長の訓示では、本競技会に対する同窓会の支援に対し感謝の言葉をいただきました。

佐藤副会長によるメダル贈呈

佐藤副会長からの激励

（総務部　３２期海　石田伸介　記）

◇令和６年度防衛学特論研究レポート発表会

2024.12.27

令和６年度防衛学特論研究レポート発表会が、防衛大学校において令和６年 12 月 18 日（水）1010～1620 の間で実施され、３名の理事（中西理事、山田理事、鵜居理事）が校外来賓者として参加しました。

防大同窓会は、平成 24 年から学術向上に寄与するため、学生の意欲向上を狙いとして「統率」「国防」「戦史」「戦略」「軍事と科学技術」の５部門における褒賞（副賞）支援を行っています。

発表会では、陸・海・空の要員に分かれ、優秀レポートに選ばれた陸 11 名、海６名、空６名(留学生各１名を含む)が、第４学年（69 期）及び第３学年（70 期）等が聴講するなか、作成時に得た論理的思考を展開しながら、防大生らしくわかりやすい発表を行いました。また、留学生も日本語を使い日本人と違う視点で発表・討議を行いました。

表彰は、発表会終了後に記念講堂において行われ、中谷学群長による講評の後、中西理事が激励の言葉を述べました。

（総務部　33 期　陸　澤﨑伸二　記）

海上要員の発表会風景

航空要員の発表会風景

中西理事からの激励の言葉

受賞する女子学生

受賞した陸上要員

令和６年度防衛学特論（海上要員）研究レポート発表会
防衛大学校防衛学教育学群
令和６年１２月１８日（水）

受賞した海上要員

令和６年度防衛学特論（航空要員）研究レポート発表会
防衛大学校防衛学教育学群
令和６年１２月１８日（水）

受賞した航空要員

◇卒業留学生記念祝賀会　９カ国２３名の卒業を祝う

2025.03.21

３月１２日(水)、防衛大学校校内において、令和６年度 卒業留学生記念祝賀行事が執り行われました。祝賀行事は、徽章授与式と懇親会の２部構成で行われ、第６９期卒業留学生、９カ国２３名※のほか卒業留学生担当協力家庭（ホストファミリー）２４名、関係大使館武官、協力家庭会及び学校関係者など約９０名が参列しました。

防大同窓会が留学生卒業祝賀行事に参加するのは、今回で３回目となります。

※カンボジア３名、インドネシア２名、ラオス１名、マレーシア２名、ミャンマー２名、

モンゴル１名、フィリピン２名、タイ５名、ヴェトナム５名

懇親会に先立ち、徽章授与式が執り行われ、久保学校長が卒業留学生の一人一人に徽章を授与し訓示を行いました。その後、参列者との記念撮影が行われました。

学校長による徽章授与

久保学校長による卒業留学生への訓示

懇親会は、今年も防大主催で開催され、協力家庭会の協力・進行の下、終始和やかな雰囲気の中で行われました。久保学校長は、留学生のこの５年間の苦労への労いの言葉と、協力家庭会及び学校関係職員への感謝を述べられました。

続いて祝辞を行った村川防大同窓会会長は、４４年前の入校当時、留学生の数がシンガポール及びタイからの３名しかいなかったこと、自衛官現役時代に、シンガポールでは防大時代の部屋長に歓迎されたこと、フィリピンでは世話をしてくれた将校が偶然対番系列の防大卒業生だったこと、タイでは同期生が水先案内人として見事な日本

語で日本の艦艇を誘導したことなどのエピソードを紹介し、同窓生の活躍が頼もしく、本当に勇気をもらう思いをしたと述べると共に、今後のアジア・太平洋地域における平和と安定への寄与に期待をすると述べました。

村川防大同窓会長祝辞

感涙に咽ぶ卒業留学生

お母さんへの花束贈呈

懇談では、在校留学生からのビデオメッセージの紹介で後輩からの感謝の言葉等が伝えられ、その後、卒業留学生一人一人からのお礼の言葉と協力家庭への花束贈呈が行われました。挨拶の途中、お父さん・お母さんへの感謝の涙で言葉を詰まらせる場面もありましたが、最後は卒業留学生全員による学生歌斉唱で会は締めくくられました。

卒業後２３名は、一部、幹部候補生学校へ入校する者を除き、其々の国に帰り、其々の任務に就くことになります。

（起案・文責　３３期　大戸英円）

◇令和６年度断郊・持続走競技会の激励

2025.03.21

令和６年度断郊競技会（70 期３学年）及び持続走競技会（69 期４学年）が、防衛大学校において令和７年３月６日（水）、断郊競技会は午前中、持続走競技会は午後にかけて 実施され、小林副会長が校外来訪者として激励しました。

今年は校内コースに変更し、陸上競技場横をスタートして競技場に戻る約 5.2Km のコースを、背嚢を背負った７名以上の分隊が気合も十二分に力走を繰り広げていました。午前中は悪天候後の肌寒い状況でしたが、今年度から初の家族観戦が行われる中、コース各所で熱い声援、応援が行われていました。

その声援に押され、早い分隊で 20 分、遅い分隊では 25 分以上かかるところもありましたが、男女問わず、遅れるメンバーを支えながらゴールを迎える光景が多く見られ、つい自身の苦い経験を思い返しながらの激励となりました。また、早い分隊には女子学生も入り、男子学生にも劣らず最後まで走り抜いた姿に感動さえ覚えました。

持続走競技会は、約 5Km のコースで５人のリレー方式で行われ、風が弱まり少し暖かく感じる天候でのスタートとなりましたが、早いチームは 15 分／人程度で走りきるなど、卒業を目前にした４学年は体力維持ができていることを確認できました。

なお、閉会式は 13 日（木）に実施され、小原台事務局長からメダル授与となりました。ゴール後の各学生の全力を出し切った若々しい姿に頼もしさを感じ、実りの多い競技会であったと感じました。

断郊競技会結果

○ 大隊対抗

第１位：第４大隊（平均：24 分 03 秒）
第２位：第３大隊（平均：25 分 15 秒）
第３位：第２大隊（平均：26 分 14 秒）

○ 分隊対抗

第１位：第 401 分隊（20 分 03 秒）
第２位：第 301 分隊（20 分 37 秒）
第３位：第 402 分隊（20 分 47 秒）

持続走競技会結果

○ 大隊対抗

第１位：第４大隊（平均：17 分 51 秒）
第２位：第２大隊（平均：18 分 10 秒）
第３位：第３大隊（平均：18 分 20 秒）

○ チーム対抗

第１位：第２大隊第１チーム（1 時間 15 分 05 秒）

第２位：第４大隊第１チーム（1 時間 16 分 20 秒）

第３位：第３大隊第１チーム（1 時間 18 分 43 秒）

断郊競技のスタート

応援を受け走る学生たち

久保学校長の号砲で一斉スタート

舎前を走り抜ける学生たち

（総務部　33 期　陸　澤﨑伸二　記）

◆同窓生は今

◇68 期生に聞く　～陸自一般幹部候補生（１）～

2024.12.01

「真に自分と向き合って得た気持ち」

陸上自衛隊幹部候補生学校
第３候補生隊第３区隊
一般幹部候補生　陸曹長　**村田　菜緒**

私は現在、陸上自衛隊幹部候補生学校１０５期ＢＵ課程に入校中の防衛大学校６８期卒業生の村田菜緒です。

来年度任官し、幹部候補生学校に入校する予定の６９期の皆さんは現在どのような防大生活をお過ごしでしょうか。昨年度の私自身を思い返すと、任官への不安を抱きつつも、卒業研究に追われつつ、最後の学生生活を楽しんでいたと記憶しています。最後の１年を様々な気持ちで過ごす皆さんに向けて、私の話が来年度の生活の一助となればと思います。

現在もなお、幹部候補生学校での修学を続けている私ですが、入校１か月が過ぎた時期、退職を考えていました。退職を考えた理由は、体力的なきつさよりも、精神的なきつさで、対番のような存在でありつつも同期であるＵ区分（一般大学出身者）のバディーとの接し方に悩んだことが大きな要因でした。そもそも、一般大出身者と防大出身者の立場は本来対等であり、私は教える立場ではない、しかしながら、知識や経験のアドバンテージのある防大生がいかに助けつつ切磋琢磨することができるか、ということに一人模索し、パンクしたこと、それが引き金となり、「私は自衛隊に向いてないのではないか。辞めて別の道に進もう」という決断をしました。そのような私に対し、ありがたくも気にかけてくださった防大時代の上級生や、周りの職員の方々、そして家族と話すうちに「辞める」ことに固執していた思いが徐々に溶けていきました。その私の思いを変えるに至った出来事が２つありました。

１つ目が、候補生隊長との面談でした。上記に述べた通り、候補生隊長との面談を行うまでの私は、特にバディーとの関わり方に悩んでいました。日常動作においてバディーが何か失敗をした際、自分のサポート不足だと思い、自分自身の要領の悪さに情けなさを感じていました。そんな私に対して「そんなに思い詰める必要はない、むしろ、傍で成長を楽しむくらいの気持ちでいいんだよ」と声をかけてくださった。言われた瞬間は素直に受け入れられるほどの心の余裕がなかったものの、その言葉は、徐々に心に浸透して「辞めたい」という気持ちが徐々に冷静になっていく中で、ふとした彼女の言動に対して「こんなにも成長している」と親心にも似た気持ちが目覚めているということに気づいていきました。その気持ちの変化によって、相互作用的に幹部候補生学校を続けていこうという意思が強まっていき

ました。

そして２つ目は、退職するのだと決断し、意思表示してゆく過程で生まれた別の意思でした。区隊長に対して、退職の意思表示を行い、理由を聞かれた際、自分自身が自衛隊に向いていないからだと伝えました。そのように伝えながらも、同時に心の中で「本当にそう言えるほど自衛隊という組織に対して本気で向き合ってきたのだろうか」という疑問がわいてきました。そう気づいたときに「この学校の教育訓練すべてに対して本気で向き合って、心から向いていないと思ったときに辞めよう、後ろ向きな気持ちではなく、別の何かに進みたいから辞めるという前向きな選択をしてここを去ろう」と決意しました。実際、防大時代の訓練時間をあまり本気で取り組んでいなかった私は、そう決意してから本気で向き合ってみると、訓練も教育も、それまで自分が思っていたよりも楽しいものだと気づくことができ、それまで以上に充実した日々を過ごすことができるようになりました。５月のゴールデンウイークを過ぎたころには、退職したいという気持ちよりも、伸び代しかない自分自身やバディーの成長に気持ちが上がるとともに、同期と過ごす日々を楽しむことができるようになりました。

この入校当初の経験から、私は自分自身の生き方や他者とのかかわり方について深く考えることができ、より自分の中にある芯を強くすることができたと考えています。入校から５か月が過ぎ、卒業まで折り返し地点となった現在でも、つらいことやきついことがあるとめげそうになりますが、周りの同期とともに切磋琢磨し、成長できるこの環境を楽しみながら過ごしています。

最後になりますが、同様に卒業まで残り僅かとなっていく４学年の皆さんも、今という時間を本気で向き合って楽しんでください。

（令和６年１０月）

◇68 期生に聞く　～陸自一般幹部候補生（２）～

2024.12.01

「幹部候補生学校に入校してみて」

陸上自衛隊幹部候補生学校
第４候補生隊第４区隊
一般幹部候補生　陸曹長　**小田　健人**

私は現在、陸上自衛隊幹部候補生学校第１０５期一般幹部候補生ＢＵ課程に入校中の防衛大学校第６８期卒業生、公共政策学科、陸上競技部の小田健人です。

この度、『小原台だより』に寄稿する貴重な機会をいただきましたので、教育半ばではありますが現時点で私が幹部候補生学校に入校してみた所見と、防衛大学校で学ぶ後輩達に対する想いを綴りたいと思います。

我々６８期卒業生が幹部候補生学校に入校して早くも５か月が経過しました。４年間という長い年月を防衛大学校で送ってきた私にとって、幹部候補生学校という新しい環境は中々慣れないものであり、日常起居から野外訓練をはじめとする各種訓練に至るまで多くの苦労があったことを思い出します。その一方で、苦労の数だけ達成感と自分自身の成長を感じてきたのも事実です。防衛大学校と比して厳しい時間的制約の下で肉体的・精神的に高いレベルが要求される環境であることは間違いありませんが、我々が取り組む訓練は幹部候補生が幹部任官にあたり持つべき資質と基礎的な識能を段階的に修得できるように計画されています。指導部（区隊長、付教官、助教の計３名で編成。日常起居における服務指導から野外訓練の区隊指導を担う。）も我々候補生の練度と時期的特性に応じて常に候補生を第一として熱心にかつ一貫した教育目的の下理性的に指導をしてくれます。全ては、我々が将来の自衛隊の骨幹として、強い責任感と実行力で部隊を指揮するに足る資質を育成するためです。それゆえ、幹部候補生学校での日々は決して楽なものばかりというわけにはいきません。真剣に取り組んだ分自分自身を更に大きくしてくれる良き修練の場としての環境があることは、これから幹部候補生学校に入校する学生の皆さんにもぜひ知っておいてほしいと思います。

今後、我々は藤山武装障害走、５０ｋｍ徒歩行進、総合訓練と今までよりも厳しい訓練に臨むこととなります。これまでの修練の成果を発揮し、かつ更なる成長を遂げることができると信じ、同期とともに精進していく所存です。

さて、話は変わりますが防衛大学校と同様に幹部候補生学校においても同期というのは一心同体、切っても切り離せない存在です。厳しい幹部候補生学校の生活の中でも同期と行動を共にし、話をする時間は何よりも楽しいものであり、日々の心の支えとなっています。しかし、幹部候補生学校における同期は、防衛大学校のそれとは少し

異なります。ここからは、この寄稿文を読んでくれている後輩達に向けて、これから皆が出会う同期はどういう人なのか、彼らと生活を共にして私が感じたこと、共に高め合うために防衛大学校で何をすべきなのか、について私なりの考えを伝えようと思います。

幹部候補生学校で出会う同期は、その多様性という点で特徴があります。個性の豊かさの話ではなく、それぞれが多様なバックグラウンドを持った集団であるということです。部内選抜者（Ｉ）の入校式等における厳正な態度、溢れ出る気迫からは自身の出身部隊を背負って入校しているという強い信念を感じ、背筋が伸びる思いでした。一般大学卒業者（Ｕ）は学びの意欲をもって急速に成長していき、入校当初我々が手助けしていたのが信じられないほど頼れる同期になりました。その中でも一定の部隊経験を経て入校した者（Ｕ'）は同じＢＵという立場でありながら現場のプロとしての一面を有しており、経験値や戦闘行動等に対する理解度に差を感じる機会も少なくありません。彼らを知るほど、それぞれが同期として頼もしい存在であると思うと同時に、改めて防衛大学校での４年間を経験してきた防大卒の価値とは何だろうかと考えるようになりました。

よく聞いてきた防大卒の強みとして、この統合の時代に陸海空問わず４年間を共にした気の許せる同期がどこにでも居るということが挙げられますが、それを実感するのはまだ先のことではないかと感じています。明確な答えはまだありませんが、この５か月間の生活で役立っていると実感していることの１つは、防衛大学校の学生舎生活や各種行事における運営の過程で身に着けた、目標に対し組織として方向性を決定し、試行錯誤しつつ実行する能力やそれに必要な論理的・科学的思考力です。目に見えて目立つような能力ではありませんが、幹部候補生学校も個人ではなく常に組織としての行動が必要とされる以上、最大２,０００人規模の組織で活動していた中で得た感覚というのは信じて間違いないと思います。

今この寄稿文を読んでいる後輩達には、学生舎や各種行事、特に競技会に運営側として積極的に関わり、経験を積んでほしいと思います。個人で目標達成するのと、組織として目標達成するには、全く異なる過程と困難を伴います。組織運営の感覚を養うには座学的な知識だけではなく、経験が必要です。４年間という膨大な時間と、数えきれないほどの挑戦の機会を有効活用して、多くの学びを得てほしいと思います。

最後になりますが、皆さんと部隊で会えることを楽しみにしています。

（令和６年１０月）

68 期生に聞く　～海自一般幹部候補生～

2024.12.01

「伝統とは」

海上自衛隊幹部候補生学校
第７５期一般幹部候補生課程　第６分隊
一般幹部候補生　海曹長　**八鍬　龍志**

海上自衛隊幹部候補生学校・第７５期一般幹部候補生課程（Ｉ課程）の八鍬候補生です。この度、防衛大学校 第６８期本科学生の卒業生を代表し、「小原台だより」に寄稿する機会を頂きましたので、「伝統とは」と題し、私が感じたことを綴ろうと思います。

緊張と不安を胸に門をくぐった３月末から約半年が過ぎ、当初に比べたら少しは立派な幹部候補生になったと感じます。生活には慣れ、元気で活発な同期の姿を最近目にすることが増えました。外出点検のための容儀の整備や、集合に遅れまいと５分前の精神の実行などが当たり前のようにできるようになりました。最初の頃は、これが果たして将来の何に役立つのか、疑問に感じることも多々ありました。同期と議論を交わす日もありました。しかし、その行動が習慣化された今、疑問を持ちそれを変えようとする人は少なくなりました。半年で卒業できるしいいかな、と思う人がいるのかもしれません。その中で感じた海上自衛隊幹部候補生学校（以下「候校」と称します。）という教育機関から、我々候補生、そして将来の幹部自衛官に求められていることについて、「伝統とは」と題して、皆様に伝えたいと思います。

前期学生長として勤務し、日々学生隊の現状と目標の乖離を埋めるため、業務を行ってきました。防衛大学校とは異なる規則や日課時限等から手探りの日々が続きました。集合時は必ず５分前に集合すること、毎日実施される巡検のための準備、甲板掃除をすること、初めての外出点検終了後、それまでの疲労の蓄積と達成感から門の外に出たときは汗だくの制服のまま、抱き合って喜んだことは今でも覚えています。しかし、数日が経ち同期から不満の声をよく耳にすることが増えました。結局５分間待機するなら集合はオンタイムでいいのでは？巡検のこの統制事項は何の意味があるの？外出点検の意味は？など、学生の長である私に沢山の意見が届きました。当時の私は、今は海上自衛隊に必要とされる基礎の資質を習得する、型にはめる時期だから頑張ろう、と声をかけました。納得する同期もいれば、しない同期もいましたが、やり続けました。正直に申し上げると私自身、これは将来の何に役立つのか疑問に思うことはありました。

候校の規則の一つに「学生服務要領」があり、それには学生生活は学生主体で作り上げ、学生生活を通して将来の幹部自衛官に必要な基礎を修得することを目的とする、と記載されています。従って、学生の手によって上記に

記した将来の何に役立つのか、という不満を「学生服務要領」の変更で解決することはできます。実際、議論を行い変更した部分もあります。しかし全ての変更はできませんでした。いえ、できなかったではなく、しなかったと今では考えます。

規則を変更するためには膨大な準備が必要です。なぜなら長期に渡り、その規則に則って生活をした先輩たちの考えを変更する、言い換えると必要でなくなったものを現状や目的に適応させる作業になるためです。そこでなぜ、変更する必要があるのか、変更後の新対策は目的に適したものなのか、予想される問題はないのか、といった様々な意見に対して準備をする必要があります。またそのための議論は長きに渡ると容易に想像できます。試験や訓練等で多忙の中、それに時間を割ける、真剣に取り組むことは困難です。したがってそれに向き合う意志と達成できる力が私たちに求められている資質ではないのか、と考えます。

海上自衛隊には「伝統」を継承する文化があります。常に精強で即応体制で取り組める理由にはこの文化が非常に役立っていると感じます。しかし、私はこの「伝統」という言葉を誤って理解してはいけないと考えます。先ほど、候校では学生服務要領を通して我々に必要な基礎を修得するために規則を変更できると申し上げました。これはつまり「伝統」には良いものだけでなく悪しきものがあるいうことです。悪しきとは、その時代や情勢に適していない、効率や必要性の薄いものだと考えます。我々候補生はその伝統を変える力があり、権利があります。その権利は活用しなければなりません。

近頃、海上自衛隊では不祥事が生起しました。これに対し様々な議論が行われ、現在進行形で対策が講じられていると考えます。この瞬間にも「良き伝統」はよりよいものに継承され、「悪しき伝統」は淘汰され変更されています。我々の先輩たちも悪しき伝統と向き合いながら、専心職務に励まれているのです。我々は１年後には部隊に配属されます。候校での１年間は一瞬です。これを読んでいる同期、後輩たちには次のことを伝えたいです。挑戦し常に進化を目指せ、我々が今後の「自衛隊の伝統」を築き上げるのだと。残り半年間で良き伝統を継承できるよう、日々向き合います。来年度、やってくる後輩たちへ、良い伝統を継承し、悪しき伝統には立ち向かい、時には変えながらよりよい候校生活を送ってください。

（令和６年１０月）

68 期生に聞く　～空自一般幹部候補生～

2024.12.01

「航空自衛隊への第一歩」

航空自衛隊幹部候補生学校　学生隊

一般幹部候補生　空曹長　**大久保 勇志**

１　はじめに

防衛大学校（以下「防大」という。）６８期航空要員卒業生を代表して本寄稿文を執筆する機会をいただけたことに感謝します。本稿を通じて、後輩達に今後の希望を与え、諸先輩方へ私たちの頑張りをお伝えすることができれば幸いです。

２　幹部候補生学校に入校して

今年の３月末、晴れて防大を卒業し、航空自衛隊の制服に袖を通しました。学生という身分から航空自衛官になったことを実感し、ワクワクしたことを鮮明に覚えています。幹部候補生学校（以下「幹候校」という。）に入校して様々な訓練や日々の生活を送る中で、入校前に抱いていた自衛官としての使命感や責任感よりも、更に高いレベルの使命感や責任感が必要であると実感しました。私たち第１１４期（防大及び一般）課程（以下「BU 課程」という。）学生は、入校から約５ヶ月が経ち、導入期、練成期を終え、今後は完成期としてこれまで知識経験として培ったものを発揮し、能力の定着及び更なる伸展に繋げていこうとしているところです。防大の後輩たちは、幹候校にて具体的にどのようなことをするのかという点について一番気になるところだと思いますが、まずは、幹候校の教育理念である「自ら考え、判断し、行動する航空自衛隊幹部」について理解する必要があると思います。

幹候校においては、例えば当直業務など、人前で指揮を執る場面が多いです。ここでは部隊行動の指揮を執るだけではなく、朝礼等の計画立案まで任されます。学生の能力伸展に繋げるべく、適時性を持った計画を立案し、指揮官としての任務意識を持って取り組むことになりますが、防大出身者においてはその指揮官としての成果に如実に実力の差が出ています。つまり、防大時代にいかに考えて行動することができていたかが、大きくその結果の差として現れているということです。防大においては、週番や長期勤務学生といった役割を担うことはありますが、定められた期間、特定の者にその役割は限られてしまっている現状ではないでしょうか。幹候校ではそうはいかず、あらゆる瞬間に指揮官としての役割を意識し行動せざるを得ない状況になります。防大時代にいかに多くの失敗を含む経験を積んでおくかが本当に大事であり、それぞれが立つ立場において、「考えて」「判断して」「行動」することを防大在学中に癖づけておくことで、幹候校で良いスタートが切れると確信しています。

３　幹候校の魅力

幹候校での課程生活における魅力の一つに「交友関係」があります。私達は BU 課程として防大出身者と一般大学出身者の混合の課程ですが、その他にも部内課程（通称Ｉ課程）や飛行幹部課程（通称 A 課程）、医

科歯科看護科課程（通称 MDN 課程）といった、様々なバックグラウンドを持った課程の学生と集団生活をしています。共に生活する上で、私達は防大出身者のみのコミュニティに縛られず、他課程の学生との交流から多くの刺激を受けることができます。例えばＩ課程の学生は、年の近い学生から２０歳近く歳が離れた学生も在籍していますが、豊富な部隊経験を活かして懇切丁寧かつ部隊の実情を踏まえたアドバイスをしてくれます。U 学生は、私達防大出身者と比べて自身の体力や自衛隊経験の無さを自覚し、陰で努力している姿をよく見せてくれます。私達防大出身者はそのような姿を見て初心に帰り、多くのことを学ばせてもらっています。

このように、様々な経験と知識を持つ同期と、共に汗を流し、議論を交わす等の防大では絶対に味わうことのできない経験ができることも幹候校の魅力です。

４　活かされる防大時代の経験（後輩への言葉）

（１）健全な衝突

今、防大で学生舎生活や各種訓練に取り組んでいる後輩の皆には、同期とぶつかることを恐れずに、熱意を持って様々なことに挑戦してほしいと思います。なぜなら、ここ幹候校での生活においても、その経験が大いに役立つからです。先ほど防大在学中にいかに「考えて」「判断して」「行動する」ことが幹候校での生活に活かすことができるかを述べましたが、周りをどのように巻き込むか、そのアプローチを考えることが今後の生活での強みになるポイントです。

防大で得られる人間関係は、お互いに時には助け合い、競い合うことのできる腹の底から信頼し合えるものですが、その関係性は一朝一夕で得られるものではありません。防大の２学年は、１学年に対し直接指導を行い、４学年の方針を元に運営することになります。中隊の運営においては４学年の方針がどれだけ下級生に浸透しているかが非常に重要になり、直接指導する２学年は、同期間での協力が欠かせません。この際特に悩むことは、共に同じ立場で物事を考える同期との関係性だと思います。物事を本気で考える時こそ同期との衝突は避けられません。

防大とは違い、指揮するのは下級生ではなく同期という点から、当初はやりづらさを感じる場面が多々ありました。私自身、体育係として区隊員の体力向上を図り、みんながきつい、やりたくない、ということをやらせる立場にありましたが、その必要性について熱意を持って説き、同期のみんなを同じ方向に向かわせることができました。そのような場面で、防大４年間で経験した健全な衝突が活かされます。熱意を持って役割を全うし、同期に対して自分の考えを素直にぶつけることは理想ですが、普通なら関係性を壊したくないという保守的な考えになる者が出てくることもあります。だからこそ、今後も共に学び、同じ立場で日本の国防に従事する同期と本音ベースで語ることができるよう、防大在学時からぶつかることを恐れずに挑戦してほしいと思います。

（２）時間の有効活用

幹候校においては、時間の上手な使い方が求められます。課題や指導受け、試験勉強などを、課業外の限られた時間の中でこなしていくことは容易なことではありません。防大時代には自習時間が確立されており、また、授業の無い時間等も活用して体力練成などの自己研鑽に励むことができると思いますが、今のうちから計画性を持った行動をとることを心がけてください。その場その場での対応を習慣づけていると、幹候校での生活のギャップに対応できなくなります。時間が多くある中でも、いかに効率よくタスクをこなして自己研鑽の時間に充てることができるかを追求して生活することで、ここでの生活がより充実したものになるはずです。

５　最後に

防大在籍中は早く部隊に行きたいとばかり考えていましたが、ここ幹候校での学びは非常に貴重なものであり、新しい学びが多くあります。一部、防大での既習事項の復習になってしまうようなものに対して物足りなさを感じたこともありましたが、学ぶうちに自分の姿勢が試されていることに気づきました。自分が教官であればどのように行うかといった

別視点で熟考できる機会にもなり、自己の意識ひとつで更なる成長につなげることができます。防大においては自分の時間を多く作ることができるはずなので、精一杯同期と楽しみ、高め合い、時間を大切に、有意義に活用してください。私も胸を張って立派な幹部自衛官となれるよう航空自衛隊の第一歩である、この課程生活に全力で励んでいきたいと思います。

基地祭観閲式において観閲部隊指揮官を務めた大久保候補生（写真中央左）

（令和６年１０月）

◇今人生、真っ盛り　～３０期（陸）～（１）

2024.12.16

日の丸を胸に（ホッケー日本代表体験記）

武安　浩一　（３０期　陸上）

還暦を迎えてのまさかの機会に恵まれることになりました。まさに令和５年は忘れることのできない年になりました。と、言うのはホッケー日本代表として２回の海外遠征をおこなうことになったからです。

初代表はホッケー5'S（ホッケーファイブ）という５人制の新競技のワールドカップアジア予選でした。これは本来 A 代表が出るべき大会なのですが、A 代表は別の国際試合がスケジュールされており、B 代表クラスも国民スポーツ大会（旧国体）のブロック予選で招集できずの中で、急遽編成されたチームでした。しかも相手はワールドカップ予選突破を狙うフル代表です。

時間のない中、パスポートを準備し、フライトの予約、防具等必要な荷物の準備、休暇交渉をバタバタと進めて羽田から単身中東オマーンのサラーラに乗り込みました。実に 28 年ぶりの海外渡航です。サラーラはオマーンの中でもイエメンに近いアラビア海側のリゾート地です。案内のあったホテルは三ツ星でしたがシャワーのお湯が出ない等の貴重な経験もできました。

フライトの関係で他の選手たちより一日早い到着となりましたので、FTX 以来のさび付いた英語を駆使？し、ホテルのチェックインを済ませて前日程で行われている女子の応援に向かいましたが、タクシーが捕まえられないためホテルで交渉して（おそらく）白タクで運んでもらうことになりました。携帯片手に 100 キロのスピードで走る車に異文化を感じましたが、これはチームバスでも同様でしたので向こうでは当たり前の運転だったようです。女子チームも急造チームでしたが元代表選手を中心に国民スポーツ大会予選のない鹿児島県のメンバー、英国在住の高校生といった陣容で、惜しくも負けてしまいましたがいい試合をしていました。

ルールについては事前に送られてきた資料を読んである程度はゲームを想像していましたが、実際の試合を見てその激しさに驚きました。この競技は 11 人制サッカーとフットサルのような関係性をもった競技ですが、アイスホッケーのようにサイドライン・エンドラインを壁で囲まれており、そのリバウンドを利用する等高度な戦術性を秘めた競技となっています。ぶっつけ本番でプレーする急造チームとしては不安の多い競技でした。

今回は GK での参加なのでイクイップメントチェックのために大会オフィスに向かうと 60 歳という年齢に一様に「信じられない。」とか「コーチ（監督）ではないのか？」と言われましたが、「I'm sixty. But I'm sixteen at heart!」と返しておきました。他チームのコーチや選手も同様の反応を見せていましたが、ほとんどのチームが同じホテルに滞在していたので食堂で顔を合わせることも多くリスペクトをもって接してくれました。

驚いたのは、パキスタンの正ゴールキーパーがシャツの交換を申し込んできてくれたことで、交換したシャツは宝物になりました。また、カザフスタンの GK が部屋を訪ねてきて「あなたの方がふさわしい。」と試合の MOM 賞（半月刀の

ガラスオブジェ）を持ってきてくれたことも心に残る出来事でした。このほかにも他国選手やコーチとの交流を深める機会があり、国際試合の奥深さを体験できました。

初戦のパキスタン戦で日の丸を胸に君が代を歌った時には、胸が熱くなったことを覚えています。女子の試合以上に激しいゲームで、これを皮切りに 7 敗して終わることになりました。試合では太刀打ちできませんでしたが、アジアの強豪インド・パキスタン・マレーシアほかの本気モードと戦えたので貴重な経験値となり、GK として全試合フル出場したことで FIH（国際ホッケー連盟）の代表キャップ数 7 をいただきました。

» https://tms.fih.ch/people/30838

2 回目の海外遠征は 60 歳を迎えてマスターズの日本代表に選出され、香港で行われたインターコンチネンタルカップアジア（アジア大会）への参加でした。こちらはマスターズ（40 歳以上の年齢別カテゴリ）の大会となりましたが、前回の東京大会まで日本は 60 歳以上の部より上のカテゴリでしか参加していなかったため以前から 60 歳になるのを心待ちにしていました。

しかし今回は下のカテゴリにも参加したのでオーバー50 チームに最年長者として参加しました。50 歳台前半でチームを構成する他の参加国に対し、50 台後半（＋60 歳）が主力の我がチームの結果は 4 位（6 チーム中）でしたが、元代表を多く有する韓国に勝ったので素直に喜べました。

またこの大会では、GK と FW の二刀流で出場し、初得点を目指しましたが残念ながら壁を打ち破ることはできませんでした。

香港といえば中国の影響で政治的に不安視されていましたので、渡航について躊躇していた部分もありましたが、実際行ってみると街は活気があり、思ったより暗い雰囲気はありませんでした。ホテルから試合会場までは徒歩で移動できたので途中のパン屋でエッグタルトを買っていくというルーティーンも楽しむことができました。

会場はハッピーバレーという広大な競馬場のトラック内にある 3 面のホッケー場（その他にサッカー場 6 面、アメフト場 1 面、サブグランド 3 面がある）で行われました。ホッケーの国際試合が行われている間もサッカー場では毎日（おそらくスポーツクラブの会員チームの）試合や練習が行われ、ヨーロッパ的なスポーツ文化の一面を垣間見ることができました。また普段使われていない競馬場では週に 1 回の競馬ナイトがあり、正装の会員と思しき人々がビル状の観覧席に消えていく中、我々は一般人に交じって屋台の出店した屋外観覧席で競馬を楽しみました。ここでも香港のナイトライフの一面を垣間見た気がしました。そしてここで培ったチームの友情が次へと繋がることになります。

今年は 11 月にニュージーランドで行われたマスターズワールドカップに出場しました。今回も 50 歳以上のカテゴリで選出され約 2 週間ホッケー漬けの日々を過ごしました。今大会は男女合わせて 25 か国、131 チーム、約 3,000 人の選手・役員が参加する大規模な大会で、一部のカテゴリは南アフリカ共和国での実施となり、日本はオーバー50、オーバー60、オーバー６０IMC（実質オーバー65）の 3 チームで参加し、試合のない時間には年代の枠を飛び越えてお互いに応援しあいチームジャパンとして世界と戦いました。

オーバー50 のカテゴリには 14 か国 16 チームが参加し、4 チームごとの予選リーグを行い上位 2 チームが決勝トーナメント、下位 2 チームは順位決定戦に進む方式でした。予選リーグは開催国ニュージーランド、マレーシア、スペインと同じプール D となり 3 敗して順位決定リーグに回りました。

初戦のマレーシア戦は昨年のアジアカップのリベンジを果たすべく臨みましたが、ナイターゲームとなったため連携が上手くいかず１QT の３失点が響き１－７での敗戦となりました。

２戦目は開催国のニュージーランドです。圧倒的アウェーの中、前日の問題点を修正して前半を１失点で切り抜けました。しかし後半ギアを上げてきた開催国に疲労が蓄積し４QT 終了間際にはカード２枚で不利な状況でダメ押しされ０－５での敗戦となりました。この試合では FW として出場しカウンターからのシュートを放ちましたが力なくゴールイン直前でクリアされてしまいました。少しずつ得点の匂いがしてきたゲームでした。

第３戦はスペインとの雨の中の試合となりました。２敗同士の試合でしたが序盤に２失点してしまいました。しかし２QT に味方のシュートに空中で合わせてゴールを決め、前半を２－１で終えました。このまま良い展開で３QT を進めていましたがスタミナの落ちた終盤に追加点を献上してしまいました。４QT で巻き返すべくポジション変更で攻勢に出ましたが逆に失点を重ね１－５での敗戦となりました。

順位決定リーグに回った第４戦はニュージーランド IMC チームと拮抗した一戦でしたが先行され、終盤に１点を返しましたが時すでに遅く１－２の惜敗となりました。

第５戦は強豪国オーストラリア IMC でした。この試合は守備が安定して序盤は拮抗した試合でしたが、浮き球を押し込まれる技ありのゴールを決められ先制点を許しました。その後も一進一退の攻防を続けましたが３QT、４QT の終盤に１点ずつ決められ０－３の敗戦となりました。

最終戦はアジアカップで対戦した前開催国の香港でした。香港チームはパキスタン系、マレー系の選手が多い国際色豊かなチームでスキルフルなチームとして知られています。前回のメンバーも残っている強敵でしたが前半は取られても取り返すという攻防でしたが、スタミナの切れた後半には香港のエースにいいように切り裂かれ、反撃のチャンスも少なくなり２－９の敗戦となってしまいました。

今回勝利はお預けとなってしまいましたが学生時代に出会ったホッケーで日の丸を胸にこのような体験ができるとは思ってもいませんでした。その時期は関東学生リーグとインカレがホッケーの全てで、セレクションに呼ばれた先輩はいましたが代表となった方は知りません。今では当時代表選手だった人たちとも、酒席を囲んだり、ホッケーの未来を語ったりする関係を築いています。

現役復帰のきっかけはリーマンショックでした。急に仕事が少なくなり時間ができたことから後輩の応援のため学生リーグに足を運んでみたところ、女子部が関東２部の決勝戦で、タイトルを目指してひたむきにボールを追いかけていました。その姿を見て熱い気持ちが蘇ってきました。その日以降、ダイエットし、ホッケーに必要な走力を数年かかって獲得しました。その夏以降は合宿に参加し、毎週末防大に通い人数の少ない女子チームに交じって一緒に練習し、翌日は試合の応援に行くといったサイクルで数年過ごしました。

当然、自分が現役の頃とはルールや道具に大きな違いがあったので、戦術やスキルも全く違っていました。新規格のスティックを購入したり、ルールブックを入手したりと自分なりのアップデートを試みていましたが、限界を感じてコーチ

資格を取得しました。ここでの出会いがその後のホッケーとの関りを大きく変えることとなりました。この時受講した人には各高校、大学の監督や現役日本代表、国際 A 級審判等錚々たるメンバーがいて今でも親しく付き合っていますが、この時の縁でマスターズのカテゴリでプレーすることになりました。

今では一般の社会人チームで選手兼監督として関東社会人リーグ 1 部でプレーし、今期は優勝して東日本リーグへの昇格を決めました。このほかにマスターズ選手として 2 チームに所属し、国内のマスターズ 3 大会に出場しています。

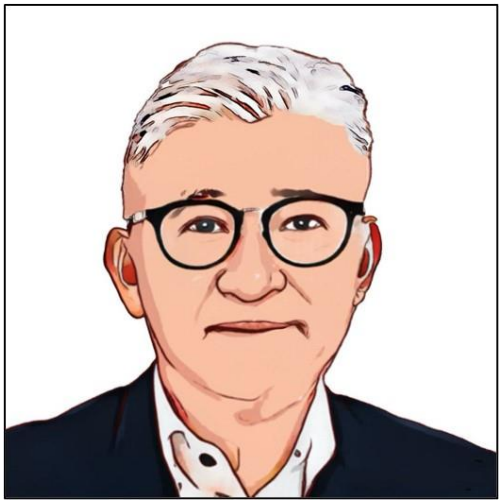
その他、杖球・TwinkleHockey といった草ホッケー的なミニゲーム会を含めて週末・平日問わずホッケーを楽しみながら次のシンガポール大会（アジア）・ドイツ大会（ワールドカップ）にチャレンジしたいと思います。

◇今人生、真っ盛り　～３０期（陸）～（２）

2024.12.16

「濡れ落ち葉亭主からの脱却：趣味の充実」

福田　洋司　（３０期　陸上）



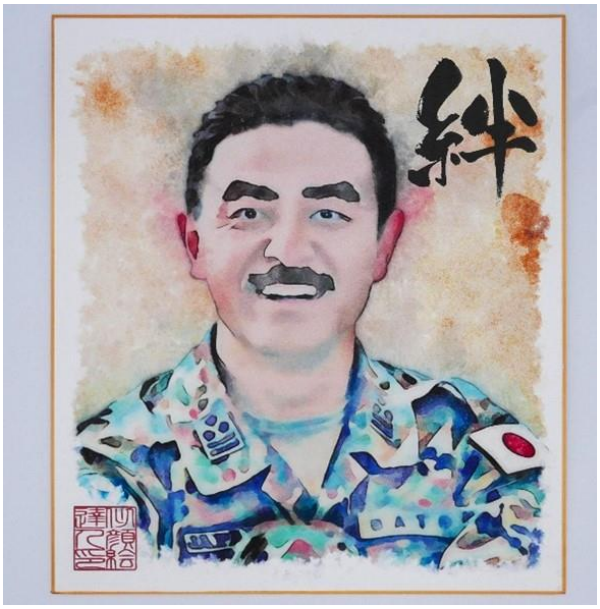
昭和に防衛大学校を卒業し、平成の時代は陸上自衛隊一筋で勤務、令和になり退職し、昨年ついに還暦を迎えました。現役自衛官の頃に比べると、年を重ねるにつれて自分の時間が増え、今後もその傾向が続くことでしょう。

ところで、「濡れ落ち葉亭主」という言葉をご存じでしょうか。これは、雨に濡れた落ち葉が靴にくっつくように、妻にぴったりと寄り添い、どこに行くにも一緒に行く夫を指します。定年後、会社生活が終わり、自宅にいる時間が増えた夫が、妻に依存しリビングに寝転がっている姿を表す言葉です。趣味もなく、友達も少なければ、自然と濡れ落ち葉亭主になってしまいそうです。

私もこれまで特に趣味はなく、人の趣味話を聞くことのみが楽しみでしたが、これからは趣味を持つことが、妻に嫌われずに生きるための鍵だと感じています。趣味があることによって、生活にハリが生まれ、日々の充実感が増すというのは、多くの人が感じていることでしょう。私も、定年前にこの実感を強く持つようになりました。

定年前に一眼レフカメラを購入し、写真を始めました。単身赴任先で風景を撮るうちに、この美しい風景を絵にできたらと思い、絵葉書や水彩画に挑戦しいい感じで仕上がりました。そして人物もいけるかもしれないと思い、「似顔絵色紙」を始めたところ、これに夢中になりました。趣味なので、作品が似ているかどうかは重要ではなく、自分が納得すればそれで十分です。

かつては、写真がない時代には肖像画が顔を伝える唯一の手段でしたが、写真が発明され、現代ではデジカメやスマートフォンの普及により、写真が主流となりました。SNS などで写真が氾濫する時代だからこそ、絵による伝達には新たな価値があるのかもしれません。似顔絵といえば、山藤章二さんのようなデフォルメの強いものが一般的ですが、特徴を強調しすぎると本人が気にしている部分が目立ってしまい、嫌がられることもあります。私はむしろ、そこそこの似顔絵で笑顔溢れるものが良いのではないかと思いました。現役時代に「笑顔無敵」を掲げていたこともあり、これは私にぴったりです。



似顔絵色紙「ひげの隊長」

似顔絵色紙「祝３度目の MVP」

某元陸幕長の似顔絵色紙を作成し、知人に見せたところ「この人のこんな笑顔はありえない」と言われました。確かに、自衛官は制服姿で写真を撮ると、笑顔の人は少ないものです。「威厳を持たなければならない」「きりっとした表情でなければならない」といった意識があるのでしょう。しかし、宴会での写真を見ると、笑顔の酔っぱらいのおじさんばかりです。

似顔絵色紙を作成して思うのは、似ているかどうかは顔の形、髪型、そして目で決まるということです。「目は口ほどにものを言う」ということわざがあるように、目が最も本人を表しているのだと感じます。整形手術で目を施すことが多いのも納得です。ちなみに、口には感情が表れます。笑顔にしたければ口角を上げ、さらに目尻を下げると、より自然な笑顔に見えます。鼻はあまり重要ではありません。描けば描くほど誇張された表現になりがちなので、鼻は控えめに描き、少しすっきりとしたラインにすると、きりっとした顔立ちに見えます。女性の場合は、綺麗に描くと喜ばれます。少し盛ったり、不要なシワや線を消せば「よく似ている」と言われます。写真で肌や目を加工すると「偽造」ですが、絵の場合は「印象」にすぎません。

ちなみに、某女性国会議員の選挙ポスターが加工しすぎだと話題になったことがあります。ポスターと実物がまるで別人のようで、まるでその種のお店でのトラブルを連想させるものです。加工しすぎた顔写真を選挙ポスターに使うのは、詐欺ではないでしょうか。学歴詐欺や国籍詐欺が問題になる時代に、選挙ポスターの写真の加工がなぜ許されているのか、不思議でなりません。

最近、AI 技術が急速に進化し、今では簡単に絵や似顔絵が生成できる時代になりました。将来、AI は多くの仕事を代替できるとも言われています。特にアーティストにとっては、この技術が脅威となり得るでしょうが、私はむしろ、AI をツールとして活用することを模索しています。 AI は有名な絵画やアニメ、漫画を元に学習し、未来的な絵を生み出しますが、一般人の顔を描く技術はまだ人間に及びません。AI に基本的な絵を生成させ、それに自分のオリジナリティを加えていけば、より面白い作品を生み出せるのではないでしょうか。

これからも新しい画材やツールが登場することでしょう。将来挑戦したいのは、起業を夢見つつ、簡素なイラスト似顔絵、集合写真の代わりとなる集合似顔絵、そして肖像画です。特に、社長室に飾ってありそうな肖像画にぜひ挑

戦してみたいと思っています。もしかしたら、それが自分の遺影になるかもしれませんが（笑）。こうした目標を持つことが、今後の人生における大きな楽しみでもあります。

キャンバス作品

◇今人生、真っ盛り　～３０期（陸）～（３）

2024.12.16

生まれ故郷の絆　～４０年振りの節句の行事への参加～

鈴木　直栄　（３０期　陸上）

昔を懐かしむことは現役自衛官の時もよくあることでしたが、現役を退いてからは余裕もでき、昔の思い出の場所に身を寄せて、童心に帰って懐かしむことができるようになりました。それは、幼少期や郷里のことだったり、３０年も前の子育てのことだったり。本稿では、そのうちの一つである、私が生まれ育った郷里で行われている節句の行事を紹介かたがた、４０年の時を超えて私がこれに参加するようになったことについて寄稿させていただきます。

私の郷里は、新潟県白根市(現 新潟市南区白根)で、毎年６月上旬に約３００年続く年中行事の町内対抗の凧揚げ合戦（白根大凧合戦：しろねおおたこがっせん）が開催されます。子どものころからこの行事への思い入れが強く（ほとんどの子供たちがそうだったと思います）、大人になったら当然のことのように地元に根付いてこの行事に主役として参画するものだと思っていました。現実としては、ゴールデンウィークの開催ならばともかく６月の行事ですので、防大入校を機に郷里を離れて以来、凧合戦に参加したことはありません。見に行ったのも防大入校以来の約４０年間で僅か２回だけです。それでも子供のころから慣れ親しんできた行事ですので、全国のどこで勤務していても、毎年この時期に“いよいよ節句だ、凧合戦だ。”と思わない年はありませんでした。

その白根大凧合戦といいますのは、信濃川の分流である中ノ口川を挟んで両岸から大凧を揚げて絡ませ、凧の綱が切れるまで引き合い、勝敗を決める行事です。大凧は、２４畳もの大きさで重さも約５０ｋｇあります。凧は、幅５～10cmの竹を組んだ骨組みに和紙を貼ってできており、凧糸も麻縄を

編んだ直径 2cm ほどの綱が使用されています。そして、１０人以上の大人が川沿いの土手を一斉に走って凧を上げ、川の上で東岸と西岸の凧を絡ませて引き合いをします。大きな凧に大勢の力と技が共演をしますが、凧

が絡んだ時の竹の骨組みが折れるバキバキという大きな音や、凧の綱がピンと張った時の水しぶき、そしてその後の綱引きはまさに迫力があり勇壮そのものです。

防大入校のために地元を離れるにあたり、近場の同級生たちからは、“なぜ離れた大学に行くのか”、“防大を卒業したら地元に戻れるのか”等々、色々言われました。もちろん、仲間内では私同様に地元を離れて、のちに関東圏に就職した者もいましたが、決まって毎年凧の準備を含め本番にはしっかり参加して年齢を重ねていたようです。このため、地元を離れて以来、まったく参画実績のない私にとっては、郷里の凧合戦の行事からは距離ができ、せめて遠目で観覧するだけの存在になってしまったと認識していました。そのような状況でしたが、一昨年、仲が良かった近所の同級生から「今度還暦凧を作って参加しようと思うので是非！」と誘いをもらいました。どちらかというと「自衛隊を退職したんだから来られるだろ！」に近かったでしょうか。そして、開催ひと月前の作業現場に寄せてもらい、一緒に鼻緒たてをしました。現場は、初対面の若い衆だらけで、知っているのは同級生と年恰好の近い近所の後輩でしたが、快く仲間に入れてもらいました。同級生たちは、さすがに年季の入った大凧職人でした。また、町内の凧合戦のメンバーたちからは、準備・本番に掛けるすごい熱量を感じました。その彼らから「ずっと自衛隊で全国を飛び回っていたそうで、やっと戻って来られましたね。直栄さんの話は先輩たちから聞いています」と。彼らの支えのもとで、盛大に還暦凧揚げが実現しました。対岸の大凧との絡み合いには至りませんでしたので、引き合いの勝負はできませんでしたが、すっかり地元の人間に戻った喜びと懐かしさを精一杯感じました。そのあとの打ち上げを含み、大昔の幼少期に戻って、同級生や令和で青春を送るメンバーたちと和気藹々、楽しい時間を過ごしました。そして、「是非、来年も再来年も」と声を掛けてもらい、この６月には子孫を連れて行き、２年連続で参加させてもらいました。「白根大凧合戦」は一見の価値があります。どなたも是非１度はご覧いただいてみてはと思います。

今では昔を懐かしんでは、エネルギーに替える日々を過ごしています。

◇今人生、真っ盛り　～３０期（海）～

2024.12.16

「研究者としてのその後」
－テレビ出演、書籍出版、大学授業！？、先生と呼ばれる日々－

佐々木　孝博　（３０期　海上）

2018 年 12 月、防衛省・自衛隊を退官して、私は研究者として第２の人生を歩むことになりました。というのも、現役時代に、在ロシア日本国大使館防衛駐在官（駐ロシア防衛駐在官）として外交・安全保障の最前線で勤務させていただいた経験や、初代の統合幕僚監部サイバー企画調整官として防衛省のサイバー攻撃対処指針の制定・サイバー防衛隊の創設などに携わった勤務経験などから、現在は、ロシアの軍事・安全保障、情報戦、サイバーセキュリティ、インテリジェンス問題などを専門とした研究者として、その後の人生を歩んでいるからです。

退官後、研究者としての第 1 歩は、富士通システム統合研究所（現富士通ディフェンス＆ナショナルセキュリティ）安全保障研究所というシンクタンクでの主席研究員から始まりました。大きな研究事業としては、脅威対象国としてのロシアの軍事・安全保障の現状がどうなっているのか、また、サイバー空間での安全保障はどのように進展していくのか、それらに対応するための我が国の安全保障はどうあるべきなのかというようなことを中心に研究活動を実施しておりました。

このような研究活動をやっているうちに、現役時代では思ってもみなかったことを、次々に経験することになりました。

その第 1 が、「書籍の出版」でした。現役時代から、論文作成という分野では、対外発表を細々とやっておりましたが、本を出版するなどということは考えてもみませんでした。そして、所属している研究所の所長を務められていた陸上自衛隊の元東部方面総監の渡部悦和さんからお話をいただき、「現代戦争論－超『超限戦』（ワニブックス PLUS 新書）」という書籍を共著で執筆する話が持ち上がり、初出版に至りました。この中で、ロシアの軍事・安全保障について（特にいわゆる「ハイブリッド戦」について）記述しました。

さらに、単著の話も持ち上がり、第 2 冊目の出版で単著としては初めての「近未来戦の核心サイバー戦－情報大国ロシアの全貌（育鵬社）」を上梓しました。

3 冊目では、前述の渡部さん、さらには同じ陸自元富士学校長の井上武さんと 3 人で鼎談本「ロシア・ウクライナ戦争と日本の防衛（ワニブックス PLUS 新書）」を出版しました。この本の関連では、東京駅近くの「八重洲ブックセンター」でサイン会も実施しました。サイン会というものはもちろん初めてでしたが、タレントのサイン会というものもこの拡大版なのかなとの印象でした。

その後も出版は積み重ねており、共著では「プーチンの『超限戦』（ワニブックス）」、「グローバルシフトと新たな戦争の領域（東海教育研究所）」、「ネット世論操作とデジタル影響工作（原書房）」を上梓しました。

今年（2024 年）には、2 冊目の単著「軍艦進化論－ペリー黒船艦隊からウクライナ戦争無人艦隊まで（扶桑社新書）」を出版し、世に本を出したのは合計で 7 冊となりました。現役時代では考えられないことでした。

退官後、出版という、考えてもみなかった体験をさせていただいた上に、さらに、驚くような体験をすることになりました。「テレビ出演」です。

最初にお話をいただいたのは、ＴＢＳテレビの昼の情報番組「ひるおび」でした。2022 年 2 月 24 日にいわゆるロシア・ウクライナ戦争が勃発し、その半月後に、この戦争に前後して行われていた「情報戦」や「サイバー戦」について解説していただきたいとのオファーでした。本格的なテレビ出演は初めてでしたし（以前に自衛隊広島地方協力本部長時代に、砕氷艦「しらせ」が持ち帰った「南極の氷」についてのインタビューを受けたことはありましたが）、生放送も初めてでした。非常に緊張しましたが、何とかこれを乗り切りました。これをきっかけとして BS フジからは 2 時間のニュース番組「プライム・ニュース」、ほぼ同時刻に実施される BS-TBS の「報道 1930」、BS 日テレからは「深層 News」、NHK 総合「キャッチ、世界のトップニュース」などから矢継ぎ早に出演のオファーがありました。内容は、主として、ロシア・ウクライナ戦争についての解説です。何度か出演するうちに生放送にもだんだん慣れてきまして、最近では、オファーがあったときには、緊張よりも、ある種のやりがいも感じ始めた次第です。この原稿を書いております 2024 年の 11 月にも BS 日テレの「深層 News」から出演依頼があり、ロシアの核ドクトリンの改訂問題、我が国周辺海域におけるロシア原潜の行動などについて解説してきました。

退官後、もう１つ、やりがいのある仕事にも就くことができました。それは大学教員業務です。現在、アカデミアの世界では「広島大学法学部客員教授」「東海大学平和戦略国際研究所客員教授」「明治大学サイバーセキュリティ研究所客員研究員」「平成国際大学法学部非常勤講師」などの職を兼ねております。そのほかにも、関西学院大学、東京工業大学（現東京科学大学）などにおいても単発的な講話もやらせていただきました。今の若い学生や外国からの留学生と、国際問題、軍事・安全保障などについてディスカッションするのは非常に新鮮で、私自身の調査研究活動にも役立っております。

このように、現役を退いた後も、引き続き、軍事・安全保障分野において、現役時代同様に調査研究活動を継続できておりますことは、私にとっては生きがいそのものであります。まさに、今回のこの投稿の大テーマ「今人生、真っ盛り」と言えるかもしれません。

ただし、この研究者という職務、非常に恥ずかしいのは、書籍出版、大学教員などにおいては、一般に「先生」と呼ばれることです。全く恥ずかしいかぎりですが、この生きがいを感じられる業務において、今後とも、皆さまのお役に立てるように尽力していこうと思います。暖かい目でお見守りいただければと思います。

今まで数々情報発信してきた内容は、研究者データベースの「researchmap」という HP に掲載されていますので、ご参考にしていただければと思います。

» https://researchmap.jp/radm-takahiro-sasaki

◇今人生、真っ盛り　～３０期（空）～

2024.12.16

宇宙ベンチャー企業にて

井筒　俊司　（３０期　航空）

この寄稿を書いている時点で、退官してから 1 年半、還暦を迎えてから半年となりました。いただいたお題が「今人生、真っ盛り」、そうはなりたいものの、果たして現状はどんなものかと考え込んでいます。振り返ってみればある程度責任ある仕事を任され、遣り甲斐を感じ始めたのが 40 歳くらい。人生 100 年時代なので、そうなると 80 歳くらいまでは納税者としてなんとか働く必要があることを考えると、その中間である還暦の今はまさに真っ盛り（折り返し？）との勝手な計算のもと、話をしたいと思います。

私が入社した（株）アストロスケールはおよそ 200 名の社員を有する宇宙ベンチャーで、軌道上サービスという、少しばかり耳慣れない仕事をしています。宇宙開発というと、人工衛星から国際宇宙ステーション、太陽系惑星から小惑星探査までと、人類の探求心と英知は留まるところがありません。しかしながら、宇宙「利用」もしくは「ビジネス」となるとどうでしょうか。GPS、天気予報、衛星通信等々、我々が利用しているものの大半は、人工衛星によるものです。人工衛星は宇宙空間にありますが、正確にいえば地球を回る軌道上です。低い軌道で 500km くらい、高い静止軌道であれば 36000km と差があるものの、「無限に広がる大宇宙」ではなく、地球の比較的近くを回っていることになります。そしてその軌道上では、寿命が尽きても回り続けている人工衛星、人工衛星を軌道に投入したロケット最上段部、衛星等から脱落した部品、更には衝突や衛星破壊により生じた数えきれないほどの大小の宇宙ゴミ（デブリ）が漂っています。その数は減るどころか指数的に増加する恐れがあり、そうなると衛星軌道はデブリで使えなくなってしまいます。JAF によるロードサービスよろしく、そのようなデブリ除去を始め、軌道上での衛星の寿命延長、役目を終えた衛星の軌道からの離脱や衛星によるデブリ等の観測をサービスとして提供しようとしているのがアストロスケールです。「航空」自衛官を卒業したので、次は「宇宙」という、非常に単純な動機で入社しました。

航空自衛官を 37 年間、防大を入れれば 40 年以上防衛庁・防衛省で過ごしてきた私にとって、民間企業の中でも少しばかりエッジの効いたベンチャー企業での勤務は刺激が多く、戸惑うところも少なくありません。まず、宇宙関係の業界のことが分かりません。三菱電機やボーイング、ノースロップグラマンといった名だたる企業が衛星を製造運用していますが、それ以外でも「○○○スペース」という企業が国内外問わず数多くあります。シンポジウムや展示会に足を運んでも「なるほど」と感心するばかりで、結局会社名と事業内容が繋がりません。またベンチャーやスタートアップの採用形態は、必要なポストに適任者を中途採用するということが主体です。採用したら数日後には図面を引いたり営業したりという即戦力の集まりです。社内で研修担当をしていますが、コンプライアンスのような法定事項で研修が必須なものはまだ良いのですが、それ以外にどのような教育研修が必要かを考えることは今後の課題の一つで

す。如何に自衛隊が訓練や教育に力を入れ、高校や大学を卒業した新隊員をしっかりと育ててきたかを改めて痛感しています。しかしながら、驚きや戸惑いは未だにあるものの、自衛官をしっかりと勤め上げてきたからこそ今の自分があり、大きく違う環境でも何とか仕事ができているのだろうと感じることもあります。

現役時代から、世の中で語られているリーダーシップ、特に大企業やベンチャーの創業者に見るリーダーシップは参考になることが多くありました。「事に臨んでは危険を顧みず」と宣誓している我々ですが、そのような企業のリーダーたちは今までにないモノを世に生み出し、一方で常に倒産や解雇という脅威と向き合っています。お互いを尊重し学ぶことは私たちに広い視野と柔軟なマインドセットをもたらします。そしてそのことは、槇智雄初代学校長が当時の学生に語り、そして今も受け継がれている「真の紳士淑女にして、真の武人たれ」にもつながる、幹部自衛官として必須なものの 1 つだと思います。

最後に今回のお題の人生「真っ盛り」とは何か、改めて考えてみました。人生で一番忙しい、もしくは頂点と考えると、今の自分が正直、真っ盛りかは疑問があります。しかしながら「真っ盛り」はグラフの「頂点」ではなく、「傾き」と考えると少しばかり合点がいくかも知れません。新たなことを勉強し知識をリフレッシュし、色々な人と知り合い、成長をする。確かにそのような「傾き」であれば、今は真っ盛りかも知れません。人生山あり谷ありと言いますが、実はそのような「位置」ではなく、その時その時の「傾き」が遣り甲斐であり、真っ盛りと感じるか否かの違いかも知れません。

◆活動報告

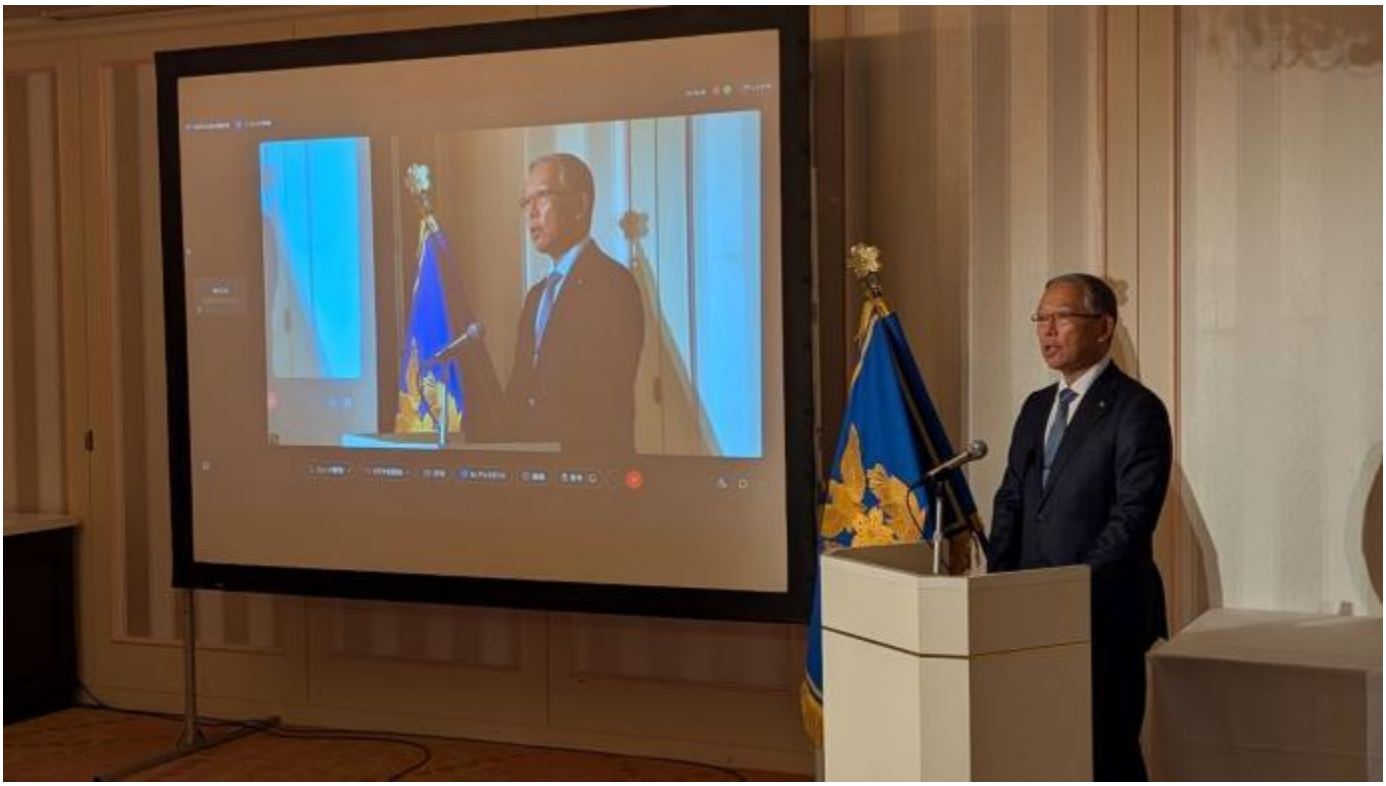
◇令和６年度防衛大学校同窓会代議員会（実施報告）

2025.03.09

令和６年度 防衛大学校同窓会 代議員会は、令和７年３月１日午後、グランドヒル市ヶ谷３階 真珠の間において、村川同窓会会長を始め２０８名（出席７２名、委任状１３６名）の参加をもって WEB 形式で開催されました。

代議員会出席者の様子

代議員会の開始に先立ち、防衛大学校同窓会の村川会長から挨拶があり、現在の防衛大学校の近況や同窓会の厳しい財務状況への協力について言及がありました。



村川同窓会長　挨拶

続いての議案審議に先立つ議長選出においては、３２期空の阿部代議員からの推薦により、２９期陸の馬場さんが議長に選出され、４つの議題について審議が行われました。

馬場議長による議事進行

第１号議案の審議においては、同窓会事務局より、「令和５年度同窓会事業報告」「会計決算報告」「会計監査報告」を行い、承認されました。

第２号議案の審議においては、「令和７年度事業計画（案）」「事業予算（案）」が承認されました。

第３号議案の審議においては、「防衛大学校同窓会会則の改正（案）」が承認されました。

第４号議案の審議においては、「令和７年度同窓会役員の選出」について、会長に２７期丸茂さんが推薦される等の案が承認されました。

理事

その後、今年度で退任する村川会長、佐藤副会長、小林副会長、中西理事、山田理事、板宮理事、上尾理事、星指会計監事が紹介され、同窓会の充実発展へのご尽力に対して感謝と労いの拍手が送られました。

休憩の後、本部事務局より、「同窓会会費納入の状況及び今後の資産見積」「令和６年度の事業の実施状況」「防衛大学校同窓会細則の改正」について報告がされました。

小原台事務局長からは、「防衛大学校の現状と取組み」についての紹介があり、学生全般の状況、特に留学生枠の拡大・期間の延伸や、防衛大学校開校祭における女子学生のための「棒引き」の新設、第５大隊制の復活等についての説明がなされました。

更に、本部事務局から「各支部長等による部隊実習激励にかかるコンプライアンス上の問題」「同窓会員等からの意見等の把握」について説明が行われました。

代議員会に引き続き、防衛大学校２８期陸ＯＢで、株式会社エイチ・アイ・エス代表取締役社長ＣＥＯの矢田素史様の記念講演会が開催されました。

講演中の株式会社エイチ・アイ・エス代表取締役社長・矢田素史さま

「生きる力」防衛大学校で授かったもの、という演題で講話が行われました。

防衛大学校時代から自衛官時代を振り返り、①先が分からないから面白いという「心構え」②得意や強みを活かす「技能・能力」③元気な「身体」という心・技・体を授かったからこそその後、転身後も頑張れたことや、その後ＨＩＳ入社の経緯や九州産交社長時代のご苦労、熊本地震を経ての挑戦等、非常に貴重な経験談を拝聴することができました。

結論として、NO と言わない実行力を高めること、継続力（習慣化）の重要性、コミュニケーション力の涵養、清廉潔白な人格、強靭な体力が重要であることを強調されました。

座右の銘は「等身大の我であれ」「人事を尽くして天命を待つ」とのことでした。

更に物事を進める上で、陸上自衛隊で教わった「戦いの９原則」と「思考過程」が非常に役立っていることも言及されました。

起案・文責　３３期　総務（国際）大戸 英円

◇第４７期ホーム・ビジット・デー（HVD)

2024.11.22

令和６年１１月１０日(日)、防衛大学校の開校祭行事に合わせて、４７期生のＨＶＤ(ホーム･ビジット･デー)が開催されました。やや肌寒さを感じるも天気は何とか持ち堪え、予定どおりの行事が執り行われました。

ＨＶＤは、防大卒業生が卒業２０周年目の節目に防衛大学校に集い、現役会員の同窓会意識の高揚や同期生の団結の強化等を目的とした防衛大学校同窓会事業の一つです。

４７期生のＨＶＤは、４月頃から先行的かつ入念な準備を行い、１１月９日(土)の前夜祭、そして１０日(日)の本番を迎えました。

４７期生ＨＶＤ集合写真(学生会館４Ｆにて)

【右上写真は、ＨＶＤ準備に尽力した戸子田１等陸佐、松瀬１等空佐】

１１月９日(土)は、新宿にて前夜祭を開催し、参加可能な者約９０名が親睦を深めました。

前夜祭風景（その１）

前夜祭風景（その２）

１１月１０日(日)は、当初、４７期生の代表である第１師団司令部　吉水１等陸佐(４７期期生会長)、海上幕僚監部　中澤１等海佐、航空幕僚監部　城代１等空佐の３名が久保防衛大学校長を表敬し、ＨＶＤ開催における便宜に対する謝意を伝えるとともに、久しぶりに訪れた防衛大学校の状況を学校長からお伺いし談笑しました。

久保学校長と代表者との懇談

久保学校長と代表者との記念撮影

また、事前に４７期生一同から記念品として、姿見鏡が４号学生隊舎４階の第４大隊首席指導教官室入口横に設置されました。

姿見鏡　４号学生隊舎４階

その後、厚生棟(旧学生会館)４階ホールにおいて、ご家族を含む約２００名が参加し、防大４７期卒業２０周年記念懇親会を実施しました。始めに４７期期生会長の挨拶及び乾杯の音頭を持って開始しました。会の終始を通じ久々に顔を合わせる同期及び家族との懇親を深めました。また、観閲式終了後、直ちに駆けつけていただいた村川防衛大学校同窓会長から、国防の中枢を担う４７期生に対する激励を頂きました。そして、久しぶりに逍遥歌を斉唱し参加した同期生全員の記念撮影で会を締めくくりました。

吉永４７期期生会長挨拶

村川同窓会長からの激励

逍遥歌斉唱

懇親会終了後、４７期生は、自由行動ののち棒倒し決勝を観戦しました。

棒倒し決勝（第２大隊の攻撃）

４７期生の棒倒し観戦風景

おわりに、４７期期生会は、今回のＨＶＤ開催で団結をさらに強固にするとともに国防に対する決意を新たにしました。

（文責：同窓会事務局ＨＶＤ担当者及び４７期ＨＶＤ担当者）

◇第２４期生ホーム・カミング・デー（HCD）

2025.04.08

２４期生ホーム・カミング・デー（以下ＨＣＤという。）が、令和７年３月２２日（土）、防衛大学校令和６年度卒業式典（本科６９期生等）への学校長招待行事等として実施されました。

前回、前々回に引き続き、今回のＨＣＤについても、卒業式の実施日がその直前まで分からない状況での準備でした。このため、２４ＨＣＤ準備委員会では、参加を希望する２４期生及びご同伴者の旅程・宿泊予定に及ぼす影響等を 勘案する必要がありました。よって、学生の行動を基準とした従前の実施日である３月２３日（日）を卒業式の実施日と仮定し、２４ＨＣＤ記念懇親会の実施日は、その前日の３月２２日（土）にすることが前年９月に決定されまし た。

さらに、卒業式がいつになっても柔軟に対応できるよう防衛大学校との綿密な調整のもと、複数の実施計画を作成しました。また、複数回の準備委員会の実施及び２４期生へのアンケート調査を行いつつ周到に準備を推進しました。

結局、３月２３日（日）に仮定していた卒業式は３月２２日（土）となり、ＨＣＤに関連する全ての行事が１日に収まるタイトなスケジュールとなりましたが、計画の細部を深化させて各行事に臨むことになりました。

３月２２日（土）、卒業式典に参列するとともに、顕彰碑献花式、観閲式見学、校内見学等を行いました。同日夕方、２４期生会総会・ＨＣＤ記念懇親会を開催し、ＨＣＤ関連全ての行事を円滑に実施することが出来ました。

２４ＨＣＤ準備委員会の様子

本科第６９期生等卒業式

３月２２日（土）当日は、好天のもと、２４ＨＣＤ実行委員の方々が０７４ ５頃に配置を完了し、０８００から正門及び防衛学館内において受付を開始しました。

０８３０から全般説明に続き、０８５０頃から時計台近傍の階段で２４期生及びご同伴者全員の記念集合写真が実施されました。その後、０９００頃から 殉職者顕彰碑において２４期生代表者による献花式を執り行われました。

記念集合写真の撮影後、２４期生及びご同伴者のうち約１４０名の方が卒業式会場に入場されました。会場に入りきれなかった一部の方は、防衛学館にお いて配信映像を視聴することになりました。

正門受付

防衛館受付

全般説明

記念集合写真

顕彰碑献花式

卒業式会場ＨＣＤ席に着席

防衛学館での配信試聴の様子

概ね予定通り１０００から石破内閣総理大臣への栄誉礼で式典が開始されました。続いて、卒業生全員に対しての卒業証書授与が行われました。

栄　誉　礼

卒業証書授与

次いで、久保学校長から式辞があり、卒業生に対してコロナ禍での学生生活に対する慰労及び幹部自衛官としての人格形成・陶冶の重要性のお話がありました。そして、卒業生である２４期生がＨＣＤとして卒業式典に参列されてい る旨の紹介がありました。

久保学校長式辞

式辞を傍聴する２４期生一同

石破内閣総理大臣からは、卒業生に対して幹部自衛官となる心構えについて の訓示が行われるとともに、自衛隊の各種改革などのお話がありました。 中谷防衛大臣からは、ご自身が防大２４期卒業生であることから、防大で得 たご経験を踏まえた卒業生への期待などのお話がありました。

石破総理大臣訓示

中谷防衛大臣訓示

式典が進み、防衛大学校学生歌斉唱となり、２４期生全員が卒業生達ととも に学生歌を声高らかに歌われました。そして、卒業式の最後に代表学生の掛け 声で卒業生が一斉に帽子を投げ、卒業生たちは会場を後にしました。

一斉に帽子を投げる６９期生と宙に舞う帽子

陸海空自衛隊の真新しい制服に着替えた卒業生は、再度、式典会場に集合し、任命・宣誓式に臨みました。

任命・宣誓式に臨む陸海空曹長

宣誓書を総理大臣に渡す陸海空代表

任命・宣誓式終了後、１３３０頃から実施された観閲式を見学しました。観閲官は２４期生の中谷防衛大臣であり、巡閲で目前を通過する大臣に盛大な声援を送りました。

観閲式会場に着席

巡閲する中谷防衛大臣へ声援

最後に、校内見学で資料館、学生舎を廻って、売店でお土産等を購入後、母校を後にしました。

資料館

学生舎

売　店

２４期生会総会･ＨＣＤ記念懇親会

卒業式同日の２２日（土）夕方、メルキュールホテル横須賀で総会及び懇親会が開催されました。１７時前から、逐次、２４期生及びご同伴者の約２００名が会場に集まりました。会場ではあちらこちらで旧交を温める姿があり、昔話に花が咲く中、総会が始まりました。！　期生会総会では、濱田様の司会のもと、杉山会長のご挨拶、１１年後に実施予定のＨＣＤ２の紹介等がありました。

総会･懇親会　受付の様子

期生会総会の状況

総会終了後、２４期生で防衛大学校名誉教授でもある森下様により、「防衛大学校の現状と取組み」と題とした講演があり、参加者は、興味深く拝聴されました。

森下名誉教授よる講演

講演終了後、逝去された同期生２７名の方々の学生時代の写真が映し出され、黙祷が捧げられました。その後、ご来賓の久保防衛大学校長、村川防大同窓会長とともに、大隊ごとに集合写真を撮影しました。

懇親会記念集合写真(第１大隊)

懇親会記念集合写真(第２大隊)

懇親会記念集合写真(第３大隊)

懇親会記念集合写真(第４大隊)

まずは、ＨＣＤ実行委員長でもある杉山期生会長から、ご挨拶と２４ＨＣＤ に対する防衛大学校及び同窓会からの各種支援に対する謝辞がありました。また、来賓を代表して、久保防大学校長から２４ＨＣＤ実施に対する祝辞が述べ られました。続いて、村川防衛大学校同窓会長の祝辞及び祝杯をもって、懇親会が開始されました。

杉山期生会長挨拶

久保防衛大学校長祝辞

村川同窓会長祝杯

祝杯後、各テーブルでは歓談の輪が広がり、ご同伴者を含め皆様は楽しい時 間を過ごされました。途中、中谷防衛大臣、タイ王国空軍留学生パコン・チャ ンシー様からスピーチがあり、大きく盛り上がりました。終盤には、応援団リーダー部ＯＢで団頭をされていた相澤様の口上から始まり、参加者が肩を組 んで輪を作り逍遥歌を斉唱しました。中締めとして、相澤団頭の防衛大学校及 び２４期生へのエールにより宴も最高潮に達して、ＨＣＤ記念懇親会は大盛況のまま幕を閉じました。

杉山期生会長と村川会長

中谷大臣の挨拶

留学生パコン様の挨拶

元応援団の相澤様

肩を組み逍遥歌を歌う２４期生

相澤様による中締

最後になりますが、２年間に及ぶＨＣＤの準備・実施に当たられた杉山期生 会長はじめ２４期生の実行委員の方々のご尽力に敬意を表するとともに、今回 研修をされた２５期生及び２６期生の次年度、次々年度のＨＣＤのご成功を祈 念申し上げ締めくくりたいと思います。

(防大同窓会本部事業部ＨＣＤ担当　32 期榮村、33 期宮本)

◇第２７回防衛大学校同窓会テニス大会

2024.06.17

令和６年５月１７日（金）、第２７回となる防大同窓会テニス大会が「有明テニスの森公園」で開催されました。　有明テニスの森公園は日本におけるテニスの聖地とされる場所であり、アマチュアからプロまでテニスプレーヤーであれば一度は有明コロシアム（センターコート）に立ってみたいと夢見られる有名なところです。大会会場はベテランプレーヤーの足腰にもやさしいオムニ（砂入り人工芝）で、全国的にも珍しい砂も芝も目の覚めるような「青」一色のきれいなコートが１６面広がっていました。

有明での開催は第２０回大会以来７年ぶりであり、競技委員の皆さんの多大な尽力により実現したもので、大会参加者から「ようやく有明に帰ってきた」「やっぱり有明だ」と熱い声が聞かれました。

開会式では谷口ディレクター（28 期）の開会宣言に続き、村川大会会長の代理として出席した大西同窓会事務局事業部長（30 期）から「これまで培ってきた闘争心は傍らにおき、心に余裕をもって楽しく、くれぐれも怪我のないようプレーしましょう」と挨拶があり、会場の雰囲気を和ませていました。その後、森岡レフリー（29 期）からルール説明が行われました。

有明テニスの森公園

開会式：大西会長代理挨拶

本大会も昨年同様１期～３３期までを５つのクラス、「レジェンド」（１～９期）、「スーパーグランドシニア」（１０～１５期）、「グランドシニア」（１６～２１期）、「シニア」（２２～２７期）、「レギュラー」（２８～３３期）に分けて競技が行われました。

「レジェンド」クラスは参加者が毎回異なるダブルスペアを組んで４試合を戦いその個人ごとの勝率を競う個人戦、「スーパーグランドシニア」クラスは同期どうしで固定ダブルスペアを組んで４試合を戦いそのペアごとの勝率を競う個人戦、そして「グランドシニア」、「シニア」、「レギュラー」の３クラスは各期ダブルス５組による期別対抗団体戦の方式で行われました。

試合前のオーダー交換・挨拶

熱戦の様子

大会運営の様子

閉会式：宮下運営委員長挨拶

全国から本大会のために参集した総勢１８６名が、日ごろからの鍛錬の成果を遺憾なく発揮して１６面のコートを駆け回り、それぞれのクラスごとの熱い戦いが繰り広げられました。

快晴となった青空のもと、黄色いダンロップボールが大きくゆっくりとした弧や鋭く突き刺さる直線を描き、青いコートによく映えていました。

コート内ではペア同士がお互いに掛け合う声が、コート傍からは同期を応援する声が会場内に響きわたるとともに、コート外では先輩・後輩が旧交を温めながら昔話に花を咲かせ、終始活気ある雰囲気に包まれていました。

大会運営は、宮下運営委員長の包容力溢れた監督指導のもと、谷口ディレクターの的確な試合進行、森岡/篠原運営委員の丁寧かつ迅速な対応により、全試合が、大きなトラブルやけがもなく、計画通り順調に進められました。

【試合結果】 （以下、敬称略：写真は優勝者）

「レジェンド」クラス（１～９期）

・クラス担当者：７期 龍岡、９期 高間

・試合方式：異なるダブルスペアで戦い、個人の勝率を競う個人戦

優　勝	小川　克彦・小川千代子（７期）
準優勝	稲垣　輝昭（７期）
第３位	高間　庄一（９期）

「スーパーグランドシニア」クラス（１０～１５期）

・クラス担当者：１４期 北村、１５期 安宅

・試合方式：同期ダブルスペアで戦いペアの勝率を競う個人戦

優　勝	加藤三千夫・加藤　玲子（15 期）
準優勝	新田　　豊・津田　秀敏（12 期）
第３位	長瀬　彰孝・湯川　正修（13 期）

「グランドシニア」クラス（１６～２１期）

・クラス担当者：１９期 塚本、２１期 村田

・試合方式：各期ダブルス５組による期別対抗団体戦

優　勝	２１期
準優勝	１６期
第３位	１９期

「シニア」クラス（２２～２７期）

・クラス担当者：２６期 衛藤、２７期 荒木

・試合方式：各期ダブルス５組による期別対抗団体戦

優　勝	２５期
準優勝	２４期
第３位	２６期

「レギュラー」クラス（２８～３３期）

・クラス担当者：３０期 篠原、３２期 田中

・試合方式：各期ダブルス５組による期別対抗団体戦

優　勝	２８期
準優勝	３０期
第３位	２９／３２期混成

【大会役員等】

大 会 役 員	大会会長	同窓会会長　村川 豊（25 期） 代理　事務局事業部長　大西 正浩（30 期）
	大会顧問	井川 宏（2 期）、瀧岡 資臣（7 期）
	大会総務	朝倉 譲（31 期）、田中 康彦（32 期）
競技委員	運営委員長	宮下 今朝芳（20 期）
	ディレクター	谷口 弘尚（28 期）
	アシスタント・ディレクター	森岡 進（29 期）
	会　計	篠原 啓一郎（30 期）
	レフリー	森岡 進（29 期）
	運営委員	欠(1 期)、欠(2 期)、欠(3 期)、欠(4 期)、松本 勲(5 期)、欠(6 期)、 龍岡 資臣(7 期)、 欠(8 期)、高間 庄一(9 期)、欠(10 期)、 児玉 和敏(11 期)、松本 圭介(12 期)、湯川 正修(13 期)、北村 善信(14 期)、 新井 洋一(15 期)、鴨木 敬直(16 期)、 横山 俊昭(17 期)、原田 幸治(18 期)、 塚本 賢二(19 期)、千川 一司(20 期)、 村田 康二(21 期)、道上 正邦(22 期)、 坂口 敏朗(23 期)、池川 昭司(24 期)、 大倉 育信(25 期)、衛藤 茂(26 期)、 荒木 淳一(27 期)、鶴田 眞一(28 期)、 森岡 進(29 期)、篠原 啓一郎(30 期)、 山口 和則(31 期)、田中 康彦(32 期)、欠(33 期)

【お知らせ】

第２８回大会は令和７年５月に開催を予定しています。皆様奮ってご参加頂きますよう同窓会一同お待ちしております。参加を希望される方は各期運営委員へ、または期生会を通じてお知らせください。

（事業部　３２期空　田中 康彦　記）

◇第２６回防衛大学校同窓会ゴルフ大会（結果）

2024.11.27

２６回目を迎えた恒例のゴルフ大会は、今年も千葉カントリークラブ川間コースにおいて、シニアの部（１３期生～２２期生）が１１月８日（金）に、レギュラーの部（２３期生～３３期生）が１１月１日（金）に開催されました。両日ともに天候に恵まれ、熱戦が繰り広げられました。

【シニアの部】

シニアの部は、総勢８９名が参加し、各期上位５名のネット成績で争われました。また、丸茂副会長が大会会長代理として参加しました。団体戦（ネット）は、シニアの部に初参加の２２期生が優勝の栄冠を手にしました。また、１３期生は今回が最後の大会参加となりました。

成績は、次のとおりです。

期　別	ＮＥＴ		
	ＳＣＲ	ＡＶＥ	順　位
１３期	372.4	74.5	5
１４期	374.0	74.8	7
１５期	378.2	75.6	8
１６期	368.4	73.7	4
１７期	372.4	74.5	6
１８期	365.6	73.1	2
１９期	366.0	73.2	3
２０期	381.2	76.2	9
２１期	393.4	78.7	10
２２期	364.6	72.9	優勝

個人戦（ネット）は、２２期生　渡邊　隆さん（スコア：６９.８（ＨＣ１３.２））が優勝しました。　また、個人戦（グロス）の各コースのベストグロスは、次の方が獲得しました。

・東南コース：１４期生 森 勉さん （スコア：８８）

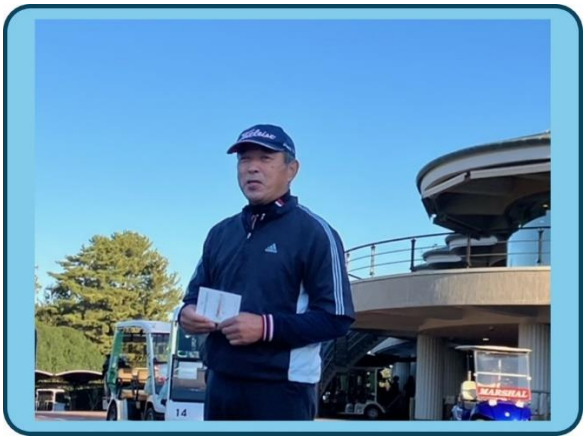
・南西コース：１９期生 野中 良和さん（スコア：８２）

・西東コース：２２期生 渡邊 隆さん （スコア：８３）

１期生から寄贈された個人総合ベストグロス賞のカップは、１９期生 野中 良和さんが保持者となりました。

シニアの部 参加者集合写真（１３期生～２２期生）

丸茂副会長　開会挨拶



競技委員長からの業務連絡

団体の部 優勝（２２期生）

個人の部 ベストグロス賞

個人の部 ベストネット賞

個人の部 各コースベストグロス賞

本大会で引退される１３期生

１４期生からの送辞

【レギュラーの部】

レギュラーの部は、初参加の３２期と３３期が加わり総勢９９人が参加し、各期上位７名のグロス及びネット成績で争われました。また、村川会長が大会会長として参加しました。

団体戦では、グロスは２８期生が、ネットは２５期生が優勝しました。

成績は、次のとおりです。

期　別	ＧＲＳ			ＮＥＴ		
	ＳＣＲ	ＡＶＥ	順　位	ＳＣＲ	ＡＶＥ	順　位
２３期	654	93.4	4	523.2	74.7	3
２４期	629	89.9	3	524.6	74.9	4
２５期	624	89.1	2	513.6	73.4	優勝
２６期	694	99.1	9	542.8	77.5	9
２７期	658	94.0	5	532.2	76.0	7
２８期	619	88.4	優勝	518.2	74.0	2
２９期	691	98.7	8	537.4	76.8	8
３０期	674	96.3	6	526.6	75.2	5
３１期	679	97.0	7	528.6	75.5	6
３２期	745	106.4	11	565.0	80.7	11
３３期	716	102.3	10	550.4	78.6	10

個人戦（ネット）は、２８期生 浅野 祐司さん（スコア：６９．２（ＨＣ１０．８））が優勝しました。
また、個人戦（グロス）の各コースのベストグロスは、次の方が獲得しました。

・東南コース：３０期生 益子 卓さん （スコア：８１）
・南西コース：２８期生 浅野 祐司さん （スコア：８０）
・西東コース：２９期生 加藤 満春雄さん（スコア：７７）

レギュラーの部 参加者集合写真（２３期生～３３期生）

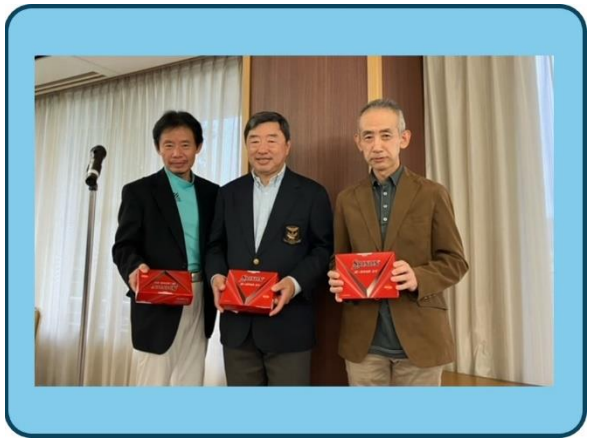
村川会長 開会挨拶

競技委員長からの業務連絡

団体の部 グロス 優勝（２８期生）

団体の部 ネット 優勝（２５期生）

個人の部 ベストネット賞



個人の部 各コースベストグロス賞

２０２５年度大会につきましても、最近の猛暑の影響を考慮し、１０月下旬から１１月上旬での開催を予定しています。

（事業部 ３２期 陸 西川 亘、３３期 陸 古庄 信二記）

◇第２４回防衛大学校同窓会囲碁大会 （結果）

2025.03.28

第２４回防大同窓会囲碁大会が令和６年１０月１９日（土）、日本棋院本院（東京市ヶ谷）１階対局場において開催され、最年長で１期生の高比様をはじめ、全国から６７名の同窓生が参加しました。

第２３回大会と同様、５名以上の期、４名以下の期でグループ分けした期別対抗で行われました。期で４名を確保できない場合は混成チームを編成し、４名以下のチームで参加しています。
競技は異なる期で４名１グループ、２個グループ８名の組を編成し、グループ内総当たりで４回戦を行い、全対局終了後、期ごとの勝ち数で順位が決定されます。

大会運営は
・大会会長　 鵜居正行理事（31 期）
・競技委員長　高比康之　　（ 1 期）
・当番幹事　 北村義明　　（22 期）
・大会総務　 同窓会囲碁担当 2 名 （ 32･33 期）
の体制で行い、大会は計画どおり進行しました。

開会式では高比競技委員長が挨拶し、本年も多数の参加者をもって大会が開催できた旨の謝意が述べられるとともに、北村当番幹事より競技ルールの説明が行われました。

開会式における高比競技委員長挨拶

北村当番幹事による競技ルール説明

競技の対局時間 80 分、選手の持ち時間一人 40 分(切れ負け)、オール互先、先番 6 目半コミ出しで実施されました。開始前の寛いだ雰囲気から対局が開始されると静かな会場に各選手が碁盤に石を打つ音だけが響いていました。対局が進むにつれ、早く終わった選手は談笑したり、他の対局中の試合を見守ったりと徐々に和やかかつ賑やかな雰囲気の中で競技は進行しました。

対局開始前の寛いだ雰囲気

対局開始、序盤の様子

対局中盤から終盤の様子

対局を終え他の対局を観戦したり、終局後時間まで再度対局する選手

鵜居大会会長が会場到着後、高比競技委員長、北村当番幹事に挨拶、懇談され、 高比委競技委員長から同窓会の大会である囲碁大会への支援に感謝の意を表され、鵜居大会会長からは大会の開催と盛会についてお祝いを述べられました。

競技委員長と大会会長との懇談

対局が終わり、成績表に集まる選手

閉会式では、鵜居大会会長から各グループの優勝チーム及び全勝した選手に賞品が授与されました。鵜居大会会長の閉会の挨拶では高比競技委員長をはじめとした大会役員、全国各地から参加された選手に対し謝辞が述べられるとともに、「囲碁は年を重ねても楽しめる頭脳スポーツとしても非常にすばらしく、ご参会の皆様が来年もこの場に集い、囲碁大会が盛大に開催されることを祈念します。」との言葉で締めくくられ大会は終了しました。

賞品の授与（期別対抗）

賞品の授与（全勝者）

大会結果は次のとおりです。

・期別対抗 ５名以上チーム：優 勝　　７期

準優勝　１１期

３ 位　　９期

４名以下チーム：優 勝　１６期

準優勝　混成２※

３ 位　１４期

※混成２は１期(1 名)、22 期(2 名)、23 期(1 名)で編成

・全勝者 松井宏(7 期) 、安井海保(9 期) 、後藤健次(11 期)、田中剛(11 期)、日暮正博(16 期)、鈴木謙次(18 期)、宮本和彦(23 期)

５名以上の部優勝：　７期

４名以下の部優勝

第２５回大会は本年１０月１８日(土)に開催予定です。

（事業部 32 期 海 山越博道、33 期 海 髙橋賢悟 記）

◆会長ルーム・活動記録

◇令和６年度　防衛大学校入校式典への参加

2024.04.19

令和６年４月５日（金）、入校式典が防衛大学校で開催され、村川豊同窓会長が入校式、観閲式、午餐会に参加しました。今年は新型コロナウイルス感染症拡大防止のための制限が全て解除され、これまで中止されていた午餐会が５年ぶりに再開されました。併せて、学校長招待を受けた本科第１２期卒業生に対するＨＣＤ２（ホームカミングデー２）も行われ、小原台での行事として、学校長との記念撮影、顕彰碑献花の他、入校式、観閲式を参観しました。

入校式は、記念講堂において、鬼木誠防衛副大臣臨席のもと粛々と挙行されました。本科第７２期学生の溌溂とした宣誓、理工学研究科前期課程第６３期、同後期課程第２４期、総合安全保障研究科前期課程第２８期、同後期課程第１６期学生及び留学生の申告に続いて、久保文明学校長式辞、防衛副大臣訓示、吉田圭秀統合幕僚長の来賓代表祝辞（防衛計画部長南川陸将補代読）がありました。多数の来賓の参列と関係ご家族が見守る中、入校生の意欲と、周囲の期待の高さが相まって講堂内は熱気に包まれました。
あいにくの曇天小雨の中、祝賀飛行は取りやめとなりましたが、観閲式が陸上競技場で行われ、上級生で編成された学生隊が、観閲官巡閲の後、緊張の面持ちで整列する本科１学年の眼前を堂々と行進しました。

続いて、学生食堂において午餐会が実施されました。学校長の挨拶、航空幕僚副長の来賓代表祝辞のあと、入校生、関係ご家族、来賓の方々相互による和やかな懇談が続き、一同で学生歌斉唱、村川会長の万歳三唱発声により、入校生の防衛大学校での学業の成就、学生舎生活の充実・発展を祈念しました。

入校式典終了後、会長は、横須賀中央で行われた、ＨＣＤ２懇親会に学校長とともに出席し祝辞を述べました。来校されました第１２期卒業生の皆様に心から感謝を申し上げたいと思います。

（３２期陸　小谷琢磨　記）

入校式（鬼木防衛副大臣に対する栄誉礼）

観閲式（観閲官による巡閲）

午餐会（村川会長による万歳三唱発声）

◇令和６年開校記念祭への参加

2024.12.05

令和６年１１月１０日（日）、村川会長は、防衛大学校で実施された第７２回開校記念祭行事に参加しました。

今年度の開校記念祭は１１月９日（土）及び１０日（日）の二日間にわたり行われ、今回の開校祭の特徴として女子学生による「棒引き」が新たに加わりました。本年の開校祭の統一テーマは「どうだ、防大」として実施され、観閲式から棒倒し決勝まで参加された中谷防衛大臣（防大２４期生）からは統一テーマ「どうだ、防大」に対して「すごいぞ、防大」の言葉を返され激励されていました。

記念式典・観閲式では中谷防衛大臣が観閲官となり、時折小雨の降る中ではありましたが学生隊学生長の指揮の下、堂々たる行進の披露、卒業生の陸海空自衛隊の各種航空機による祝賀飛行が実施されました。祝賀会では会長が万歳三唱を行い、参加者全員と更なる防衛大学校の発展を祈念いたしました。棒倒しは昨年に引き続き第２大隊が優勝しました。

（33 期陸　伊藤幸二　記）

観閲式

巡閲（防衛大臣）

万歳三唱（村川会長）

棒倒し

◇令和６年度　防衛大学校卒業式典

2025.03.31

令和７年３月２２日(土)、防衛大学校　本科第６９期学生、理工学研究科前期課程第６２期学生、同後期課程第２２期学生、総合安全保障研究科前期課程第２７期学生及び同後期課程第１４期学生に対する卒業式典が石破内閣総理大臣ご臨席の下、記念講堂において挙行され、村川豊同窓会長が出席しました。

式典は、国歌斉唱に続き、久保学校長が本年度の卒業生である本科学生３８６名及び研究科学生８４名（９か国３０名留学生を含む。）の学生一人一人に卒業証書を手渡され、続く式辞では、冒頭でＨＣＤ（ホームカミングデー）行事の一環として参列した本科第２４期卒業生に対する歓迎の言葉を述べられた上で、時を同じくして小原台に着校し４年の月日をともにしてきた本科第６９期生が成し遂げた「学生間指導のあり方の見直し」を高く評価するとともに、今後「公務員中の公務員」たる自衛官の誇りを持って人間力の涵養に努めるよう要望されました。

石破内閣総理大臣は、「本日のウクライナは明日の東アジア」という厳しい安全保障環境の下、卒業生一人一人の存在と努力が抑止の根幹であり、最高の栄誉と規律を保持する国民最後の拠り所の自衛隊の一員として、国民の負託に応えるべく現代にふさわしいリーダーシップを発揮してほしいと訓示されるとともに、２００３年１２月２４日防衛庁長官当時のＣ－１３０Ｈイラク派遣編成完結式における若手航空自衛官との忘れ得ぬエピソードの披露や、戦後８０年という節目の年に幹部自衛官としての歩みを始める卒業生に対する餞の書として吉田満氏の『戦艦大和ノ最後』を紹介されました。

続いて、中谷防衛大臣からは、自らも一員である本科第２４期卒業生の式典参列に感謝の言葉が述べられるとともに、学生時代恩師２名からの言葉、すなわち渡辺長治ラグビー部監督から送られた「我が身で悟ったものこそ真理なり（本質を理解し我が物にせよ）」、及び春日佑芳教授から送られた道元禅師の言葉「磨塼（ません。心の鏡を磨け）」が紹介されました。また、国民の信頼に応えるべく、任重く道は遠いかもしれないが、些事をおろそかにせず修養に努めよと訓示されました。

来賓代表の日本経済新聞社代表取締役会長　岡田直敏氏からは、１９４７年に定められた日経新聞の社是と２０２２年の国家安全保障戦略における国益の定義が驚くほど似ていることを紹介された後、自由、民主主義、法の支配といった我が国が大切にする価値が昨今の安全保障環境によって脅かされようとしている中、使命に対する誠実さ、真剣さと士気の高さを持つ自衛隊と、経済とが一体となって国益を守り我が国を発展させていきましょうとの祝辞が述べられました。

卒業生代表からは、「強さ」という本質を追求するため、変化を恐れずに成し得た「学生間指導の当たり前を覆す」という一大変革について、それを達成した同期を誇りに思うとともに、国防の道の第一歩を踏み出した我々の前に今後現れるであろう困難の数々についても、同期の絆があれば絶対に乗り越えられるとの力強い答辞があり、その決意を胸に学生歌を斉唱した後、帽子を高々と舞い上げ会場を後にしました。

続いて、卒業生は陸・海・空の制服に着替え、一般幹部候補生の任命・宣誓式では、各要員別に陸曹長、海曹長、空曹長に任命され、一般幹部候補生を命ぜられました。そして、各要員の代表が宣誓を行い、石破内閣総理大臣に宣誓書を手渡しました。

その後、陸上競技場に場所を移して観閲式が行われました。巡閲中、観閲官の中谷防衛大臣がＨＣＤで来校した本科第２４期生約１４０名の同期に手を振られる場面が見られたほか、卒業生が操縦する陸自ＡＨ－１Ｓ、海自ＳＨ－６０Ｋ及びＰ－１及び空自Ｃ－２及びＦ－１５Ｊによる祝賀飛行が観閲式に花を添えました。

観閲式終了後は、学生食堂において午餐会が開かれ、久保学校長のご挨拶、若宮防衛大臣補佐官の祝辞に引き続き、村川同窓会長が今後の部隊勤務に向けた激励を行うとともに、同窓会活動に対する理解と支援をお願いしたいとの言葉を述べられました。また、その後の懇談でも村川会長は広く会場内を巡られ、卒業生一人一人やそのご父兄方とも談笑を続けられ、和やかな雰囲気の中、卒業式典に係る一連の行事は恙なく終了しました。

卒業証書授与

卒業生解散！

任命・宣誓式

祝賀飛行（C-2）

午餐会での会長挨拶

卒業生との懇談

（３２期海　石田伸介　記）

◆連絡事項

防衛大学校同窓会 本部役員名簿

（2025.4.1 現在）

職 名		氏 名	期	要員
会 長		丸茂 吉成	27	空
副会長		納富 中	29	陸
		中尾 剛久	29	海
		城殿 保	29	空
理 事	事務局長	鵜居 正行	31	陸
		中畑 康樹	30	海
		後藤 雅人	31	空
	防大教授	竹平 哲也	30	空
	統幕総務部長			
	陸幕監理部長	牧野 雄三	39	陸
	海幕総務部長			
	空幕総務部長	田崎 剛広	36	空
会計監事		河本 宏章	28	陸
		間瀬 元康	28	陸
		橋口 信吾	29	海
		藤永 映章	27	空

代議員等名簿

7.1.31 現在

期	期生会会長		代議員			業務幹事	
	氏　名	要員	陸:氏　名	海:氏　名	空:氏　名	氏　名	要員
1	深山　明敏 (※)	陸					
2	高岩　利彦 (※)	陸					
3	野本　眞二 (※)	陸					
4	金田　孝之 (※)	陸					
5	大橋　武郎	空	久光　禧敬	桑原　俊介	齋藤　賢爾	浅野　勇蔵	陸
6	福塚　啓二(※)	海					
7	杉田　明傑	陸	石橋　穣	高木　基博	伊藤　文夫	中村　暁	陸
8	藤縄　祐爾	陸	廣澤　澄晴	梶浦　邦夫	篠田　雅夫	山崎　幹夫	陸
9	藤田　幸生	海				前川　忠明	海
10	石飛　勇次	陸	村松　洋一	坂東　勝昭	川田　哲雄	村松　洋一	陸
11	石川　亨	海	洞澤　佳廣	竹村　訓	赤羽　益三	後藤　健次	陸
12	相田　哲彦	空	藤本　四郎	串田　貫治	橋本　康夫	高岡　邦夫	空
13	山下　輝男	陸	篠田　芳明	新宮領　篁	花岡　芳孝	菅原　純	陸
14	河野　芳久	陸	寄田　修	齋藤　隆	稲葉　憲一	高橋　健二	空
15	林　直人	陸	瓦谷　育夫	平山　為祥	江口　啓三	佐藤　誠喜	陸
16	折木　良一	陸	石川　由喜夫	橘　恒紀	堀　好成	石川　由喜夫	陸
17	赤星　慶治	海	廣瀬　誠	赤星　慶治	永田　久雄	石村　澄雄	海
18	外薗　健一朗	空	植木　美知男	色川　喜美夫	長尾　齊	長尾　齊	空
19	岩﨑　茂	空	師岡　英行	宮浦　弘兒	下平　幸二	風間　敏榮	陸
20	佐藤　貞夫	陸	西村　智聡	加藤　耕司	渡邊　至之	今井　惠治	陸
21	河野　克俊	海	荒川　龍一郎	山本　高英	小野田　治	山本　高英	海
22	宮下　寿広	陸	田原　昭彦	畑中　裕生	福井　正明	石野　貢三	空

期	期生会会長		代議員			業務幹事	
	氏　名	要員	陸:氏　名	海:氏　名	空:氏　名	氏　名	要員
23	岩田　清文	陸	藤井　貞文	福本　出	清藤　勝則	岩﨑　親裕	陸
24	杉山　良行	空	武内　誠一	原田　哲郎	半澤　隆彦	半澤　隆彦	空
25	髙鹿　治雄	海	岡部　俊哉	河村　正雄	吉田　浩介	徳丸　伸一	海
26	尾上　定正	空	深津　孔	堂下　哲郎	尾上　定正	池畠　暢也	空
27	小林　茂	陸	小林　茂	副島　尚志	橋本　尚典	穂積　文孝	空
28	田浦　正人	陸	田浦　正人	真鍋　浩司	渡邊　博史	田浦　正人	陸
29	馬場　邦夫	陸	中村　浩之	中尾　剛久	村上　和彦	時藤　和夫	空
30	堀切　光彦	陸	山﨑　繁	時久　寛司	上ノ谷　寛	篠原　啓一郎	陸
31	前田　忠男	陸	山口　和則	今村　靖弘	後藤　雅人	山口　和則	陸
32	阿部　睦晴	空	池田　頼昭	梶元　大介	柴田　利明	植村　茂己	空
33	中塚　千陽	空	山根　寿一	齋藤　聡	沖野　克紀	沖野　克紀	空
34	佐藤　信知	空	荒井　正芳	福田　達也	小笠原　卓人	小笠原　卓人	空
35	稲月　秀正	空	戒田　重雄	伍賀　祥裕	吉村　一彦	熊谷　三郎	空
36	寺﨑　隆行	空	松永　浩二	石巻　義康	寺﨑　隆行	松永　浩二	陸
37	宇佐美　和好	空	小川　隆宏	浦口　薫	宇佐美　和好	宇佐美　和好	空
38	石井　浩之	空	浅賀　政宏	濱﨑　真吾	白井　亮次	山﨑　武志	空
39	湯下　兼太郎	陸	湯下　兼太郎	平田　利幸	中川　一	湯下　兼太郎	陸
40	清水　徹	海	梨木　信吾	川野　邦彦	石引　大吾	兵庫　剛	陸
41	堤田　和幸	海	小林　貴	堤田　和幸	中谷　大輔	堤田　和幸	海
42	土工　琢郎	陸	土工　琢郎	佐瀬　智之	富川　輝	湯舟　道彦	陸
43	鎌田　淳	空	澤　繁実	江畑　泰孝	志津　雅啓	志津　雅啓	空
44	髙橋　秀典	海	鈴木　攻祐	阿部　直樹	原田　理	阿部　直樹	海
45	青山　佳史	陸	庄司　秀明	岡澤　智和	坂田　靖弘	庄司　秀明	陸

期	期生会会長		代議員			業務幹事	
	氏　名	要員	陸:氏　名	海:氏　名	空:氏　名	氏　名	要員
46	臼井洋太郎	海	菊池　裕紀	加藤　太輔	和田　夏樹	向　康司	海
47	吉水　憲太郎	陸	清田　裕幸	笠原　健治	中里　悠花	清田　裕幸	陸
48	和田　嵩一	海	桐谷　高弘	柏木　祐一郎	齋藤　真吾	柏木　祐一郎	海
49	山上　剛史	空	松浦　秀俊	小沼　洋祐	山上　剛史	山上　剛史	空
50	吉井　拓也	陸	益田　一宇	八木　佑己	阿部　竹浩	益田　一宇	陸
51	鬼塚　勇	陸	鬼塚　勇	林　大佑	森嶋　倫	鬼塚　勇	陸
52	成田　優	陸	成田　優	岡田　航	荒木　敬	成田　優	陸
53	濵田　卓	空	江嶋　宏次	松崎　圭祐	来栖　克則	濵田　卓	空
54	金澤　慧人	空	角丸　公康	垣内　隼斗	内藤　昌孝	金澤　慧人	空
55	若月　豪	陸	若月　豪	中村　友哉	加治　政樹	若月　豪	陸
56	松尾　聡一郎	陸	松尾　聡一郎	田中　結貴	舟津　貴正	松尾　聡一郎	陸
57	我妻　国明	陸	久保　翔平	柗村　駿明	大籔　秀斗	我妻　国明	陸
58	戸口　真	海	秋島　一弥	浦山　修太朗	河野　健	戸口　真	海
59	屋代　昌也	陸	渡邊　一生	馬渡　淳司	宮川　啓一	屋代　昌也	陸
60	浜野　広大	陸	田村　洋人	畠山　尚己	庄司 和正	今尾　友哉	陸
61	久米井　勇馬	空	池上　好古	神作　友陽	工藤　将人	松本　龍二	海
62	上中　龍基	空	神木　康誠	唐川　航輝	江打　諒馬	熊木　礼於奈	陸
63	武石　太一	海	筒井　健司	笠原　豪	久保田　祥平	舟林　翼	陸
64	梅村　俊海	海	須田　悠介	森田　雄也	小川　隼人	門馬　明富	陸
65	吉田　敦	海	横山　慶次郎	坂東　渉伍	山本　悠馬	小俣　裕紀	陸
66	細谷　涼子	海	大山　智也	佐藤　日向子	町田　光	佐地　祥太朗	陸
67	堀越　智也	海	嶋田　透哉	髙田　虎哉	八尋　翼	堀越　智也	海
68	佐藤　総太郎貴久	陸	小田　健人	深澤　礼香	大久保　勇志		

※指定窓口会員

防衛大学校同窓会 小原台事務局員名簿

（2025.4.1 現在）

職名			氏名	期	要員	
小原台事務局	事務局長		中谷 大輔	41	空	将補
	事務局長補佐		宇仁 健一郎	34	海	1佐
			荒井 将人	37	空	1佐
			川口 貴浩	40	陸	1佐
	総務部	部長	中澤 信一	28	海	2佐
		補佐	鶴貝 英俊	38	空	2佐
	人事部	部長	別府 万寿博	36	空	文官
		補佐	成合 倫樹	63	海	2尉
	経理部	部長	小林 伸嘉	36	空	2佐
		補佐	山崎 武志	38	空	文官
	事業部	部長	村上 強一	31	空	2佐
		補佐	津田 武志	45	空	2佐
			田中 あずさ	58	陸	1尉
			平田 健志	63	空	2尉
	広報部	部長	越山 光正	42	陸	1佐
		補佐	福原 伸一	42	陸	2佐

地域支部長等役員名簿

7.1.31 現在

所属支部	役　職	氏　　名	期	要員
北海道地域支部	支部長	加藤　幸治	14	陸
	事務局長	－	－	－
東北地域支部	支部長	浅川　紀明	25	陸
	事務局長	若生　昭智	27	陸
栃木地区支部	支部長	正岡　富士夫	15	空
	事務局長	正岡　富士夫	15	空
群馬地区支部	支部長	石橋　輝治	5	陸
	事務局長	小島　健二	14	空
北陸拡大地区支部	支部長	濱谷　隆平	6	陸
	事務局長	濱谷　隆平	6	陸
東海拡大地区支部	支部長	今枝　隆昌	19	陸
	事務局長	川村　大介	25	海
関西地域支部	支部長	川瀬　昌俊	26	陸
	事務局長	澤井　宏保	31	陸
鳥取地区支部	支部長	吉岡　元	10	空
	事務局長	山本　洋	21	陸
島根地区支部	支部長	西村　充雄	25	陸
	事務局長	田中　秀文	35	陸
岡山地区支部	支部長	物部　明徳	22	空
	事務局長	植月　將元	22	陸
広島地区支部	支部長	佐藤　正志	22	海
	事務局長	土肥　弘実	25	海

所属支部	役　職	氏　　名	期	要員
山口地区支部	支部長	峰岡　偉津夫	15	海
	事務局長	落合　直巳	21	陸
四国拡大地区支部	支部長	山崎　忠雄	19	陸
	事務局長	松村　朝生	29	陸
徳島地区支部	支部長	山崎　忠雄	19	陸
	事務局長	新居　久佳	24	陸
香川地区支部	支部長	宇草　茂	18	陸
	事務局長	松村　朝生	29	陸
愛媛地区支部	支部長	小原　友弘	21	陸
	事務局長	津田　敦彦	38	空
高知地区支部	支部長	今村　功	15	陸
	事務局長	川田　公一	16	空
九州地域支部	支部長	野田　文久	24	陸
	事務局長	田代　勉	25	陸
福岡地区支部	支部長	野田　文久	24	陸
	事務局長	田代　勉	25	陸
佐賀地区支部	支部長	大塚　元幸	26	陸
	事務局長	福岡　龍一郎	26	陸
長崎地区支部	支部長	大平　愼一	20	海
	事務局長	広井　豊明	21	海
熊本地区支部	支部長	光永　邦保	22	陸
	事務局長	阿部　健司	19	陸

所属支部	役　職	氏　　名	期	要員
大分地区支部	支部長	藤田　太	20	陸
	事務局長	山﨑　真一	32	陸
宮崎地区支部	支部長	川﨑　朗	24	陸
	事務局長	黒木　忠広	27	海
鹿児島地区支部	支部長	紫村　敬二	18	陸
	事務局長	樺山　一孝	29	陸
沖縄地域支部	支部長	渡名喜　邦夫	21	海
	事務局長	－	－	－
小原台クラブ	会長（支部長）	宮田　晃	25	海
	事務局長	及川　正稔	28	陸
桜華会	会長（支部長）	塚口　千枝（平松）	40	陸
	事務局長	嶋津　悠加（黒田）	45	空

防衛大学校同窓会 本部事務局員名簿

（ＳＡ：専門アドバイザー）　　（2024.10.7 現在）

職　名			氏 名	期	要員
総 務	部 長		真弓 康次	31	陸
	副部長		小田 英明	31	陸
			小俵 和之	31	海
			荒木 哲哉	31	空
	ＳＡ		山坂 泰明	30	陸
	担当	総務新規事業	小谷 琢磨	32	陸
			佐々木 俊哉	32	陸
			石田 伸介	32	海
			川波 清明	32	空
		国際交流支援	川村 浩和	32	陸
			高橋 秀雄	32	空
	担当補佐	総務会議運営 新規事業	伊藤 幸二	33	陸
			澤崎 伸二	33	陸
			高田 充	33	海
			（予定者あり）	33	空
		国際交流支援	大戸 英円	33	陸
			阿蘇 晋一	33	空
			坂尾 陽子	常 勤	
人 事	部 長		桒田 昌範	31	海
	副部長		野澤 隆一	31	空
	担 当		福重 毅尚	32	陸
			芳賀 基	32	海
			木場 隆治	32	空
	担当補佐		木戸 泰雄	33	陸
			小山 雅弘	33	海
			大谷 康雄	33	空
経 理	部 長		佐野 光	31	陸
	副部長		今村 靖弘	31	海
	担 当		深谷 徳彦	32	陸
			本山 泰之	32	海
	担当補佐		堤 浩一郎	33	陸
			田村 久幸	33	海

職　名			氏 名	期	要員
事 業	部 長		永井 克征	31	陸
	副部長		伊藤 辰彦	31	海
	ＳＡ		大西 正浩	30	陸
	担当	HCD/HVD	榮村 佳之	32	陸
		HCD2	佐藤 広憲	32	海
		テニス/支部	田中 康彦	32	空
		囲碁等	山越 博道	32	海
		ゴルフ/講演	西川 亘	32	陸
	担当補佐	HCD/HVD	宮本 芳昌	33	陸
		HCD2	岸本 昌之	33	海
		テニス/支部	高草木 浩寿	33	空
		囲碁等	高橋 賢悟	33	海
		ゴルフ/講演	古庄 信二	33	陸
広 報	部 長		佐藤 恭弘	31	海
	副部長		萬 昌裕	31	空
			生田 孝治	31	空
	ＳＡ（システム事項）		時藤 和夫	29	空
	ＳＡ		徳橋 浩志	31	陸
	担当	ＨＰ	和田 政	32	空
			八木 聖一郎	32	陸
		機関紙	阿部 昌平	32	陸
			小暮 幹太	32	空
		人材バンク	川崎 誠二	32	陸
			浅野 潔	32	海
	担当補佐	ＨＰ	工藤 武	33	空
			石井 信	33	陸
		機関紙	嶋本 学	33	陸
			佐川 浩彦	33	空
		人材バンク	末廣 和祥	33	陸
			下濱 昭博	33	海